国立国語研究所学術情報リポジトリ

平成2年度 国立国語研究所年報

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0000001218

平成２年度

国立国語研究所年報

—42—

国立国語研究所

1991

平成２年度

国立国語研究所年報

—42—

国 立 国 語 研 究 所

１９９１

刊行のことば

本書は，平成２年度における研究の概要及び事業の経過について報告するものです。

本年度は，『平成元年度国立国語研究所年報（41）』，『国語年鑑1990年版』，『国立国語研究所研究報告集12』，『方言文法全国地図』第２集　（平成２年度　国立国語研究所報告97－２），『国定読本用語総覧５ ― 第三期と～ん ― 』（国語辞典編集資料５），「日本語教育映像教材中級編関連教材　『伝えあうことば』２　語彙表」，『副詞の意味と用法』（日本語教育指導参考書　19），『日本語教育映像教材中級編シナリオ集』を刊行しました。

当研究所の研究及び事業を進めるに当たっては，例年のように地方研究員をはじめ，各種委員会の委員，各部門の研究協力者や被調査者の方々の格別の御協力を得ています。また，調査について，各地の都道府県及び市町村教育委員会，学校，幼稚園，図書館等の御配慮を仰いでおります。その他，長年にわたって当研究所に寄せられた大方の御厚意に深く感謝いたしますとともに，今後とも今までと同様の御支援が得られますよう切にお願いいたします。

平成３年３月

国立国語研究所長

水　谷　　修

目　　次

刊行のことば
平成２年度刊行物等の概要…… 3
話しことばにおける文の構造の研究…… 7
言語計量調査－テレビ放送の用語調査－…… 9
現代語彙成立過程の調査……11
文字・表記の研究の国際的現状の調査……13
雑誌における振り仮名の調査研究……15
敬意表現行動の種類と機能に関する社会言語学的研究……16
言語生活における発話の類型とその機能に関する準備的研究……18
現代敬語行動の研究－学校生活における敬語の研究－……20
漢字仮名まじり文の読みの過程に関する研究……22
連続音声の音響的特徴についての実験的研究……23
方言文法地図作成のための研究……25
方言分布の歴史的解釈に関する研究……30
自然科学用語の語史研究……34
人文関係用語の訳語索引の作成……35
『花柳春話』の文体別使用語彙の比較研究……36
漢字の学習指導の実態に関する調査研究……37
児童・生徒の語彙力調査のための基礎的研究……39
幼児・児童の書きことばの獲得に関する調査研究……41
資料評価のための探索的研究……43
新聞における国語関係記事の蓄積と活用法に関する準備的研究……44
社会言語学資料についてのデータベース構築に関する準備的研究……46
文献情報の収集・整理法に関する準備的研究……47
大量日本語データの蓄積と検索に関する基礎的研究……50

国語辞典編集のための用例採集……51
日本語の対照言語学的研究……53
日本語教育のための述部からみた文構造の研究……55
日本語教育の内容と方法についての調査研究……56
日本語と英語との対照言語学的研究……58
日本語とスペイン語との対照言語学的研究……59
簡約日本語の創成と教材開発に関する研究……60
日本語教育に関する情報資料の収集・提供……62
日本語とタイ語との対照言語学的研究……64
日本語と中国語との対照言語学的研究……65
日本語教育研修の内容と方法についての調査研究……66
言語教育における能力の評価・測定に関する基礎的研究……68
日本語教育研修の実施……70
日本語教育教材開発のための調査研究……73
日本語教育モデル教材の作成……75
言語伝達行動に関する対照言語学的研究……79
日本語学習辞典の編集－基礎語用例データベースの作成－……80
日本語教育参考資料の作成……85
図書の収集と整理……87
庶務報告……88

平成２年度調査研究のあらまし

研究所の機構は次の通りである（平成３年度３月31日現在）。

- 所長
  - 評議員会
  - 庶務部
    - 庶務課 ---- 図書館
    - 会計課
  - 言語体系研究部
    国語の体系に関する科学的調査研究
    - 第一研究室　現代語の文法に関する調査研究
    - 第二研究室　現代語の語彙に関する調査研究
    - 第三研究室　現代語の文字・表記に関する調査研究
  - 言語行動研究部
    国民の言語使用に関する科学的調査研究
    - 第一研究室　社会生活における言語使用及び伝達効果に関する調査研究
    - 第二研究室　音声及び文字に関する実験的研究
  - 言語変化研究部
    国語の地域的，時代的変化に関する科学的調査研究
    - 第一研究室　方言に関する調査研究
    - 第二研究室　近代語に関する調査研究
  - 言語教育研究部
    国民に対する国語の教育に関する科学的調査研究
    - 第一研究室　言語能力に関する調査研究
  - 情報資料研究部
    国語及び国民の言語生活に関する情報資料の科学的調査研究及びこれに基づく情報資料の提供に関する業務
    - 第一研究室　情報資料の評価法及び活用法の調査研究及びこれに基づく情報資料の提供
    - 第二研究室　情報資料の収集・保存法の調査研究
    - 電子計算機システム開発研究室　言語の電子計算機処理及びそのプログラムの開発に関する調査研究
  - 国語辞典編集室　用例を収録した国語辞典の編集に関する調査研究及びこれに基づく辞典の編集に関する業務
  - 日本語教育センター
    外国人に対する日本語教育に関する基礎的実際的調査研究及びこれに基づく研修，教材作成等の指導普及に関する業務
    - 運営委員会
    - 第一研究室　日本語教育に関し，日本語の音声，文字，語彙及び文法並びに日本人の言語行動様式に関する調査研究並びにこれに基づく教育内容に関する調査研究
    - 第二研究室　日本語教育に関し，日本語と欧米諸言語との対照研究及びこれに基づく外国人の母語別，学習目的別等による教育方法に関する調査研究
    - 第三研究室　日本語教育に関し，日本語と東南アジア諸言語との対照研究及びこれに基づく外国人の母語別，学習目的別等による教育方法に関する調査研究
    - 第四研究室　日本語教育に関し，日本語と中国語，朝鮮語等との対照研究及びこれに基づく外国人の母語別，学習目的別等による教育方法に関する調査研究
  - 日本語教育指導普及部
    - 日本語教育研修室　日本語教育に従事し，又は従事しようとする者に対する一般的基礎的な研修に関する調査研究及びこれに基づく研修会等の開催
    - 日本語教育教材開発室　日本語教育に関する基本的教材・教具の開発に関する調査研究及びこれに基づく教材・教具の作成，提供

平成２年度刊行物等の概要

研究報告集(12)（報告103）

本年度は，下記の７編の報告をのせた。

１．宮島達夫　高木翠「雑誌九十種資料の和語表記」

この調査の対象は1956年の雑誌90種から抽出された約44万語のうちの和語約20万語である。分析の重点は，これらが，かな・漢字のどちらで書かれるか，という点にある。おもな結果は，つぎのとおりである。

(1)　のべ語数による品詞別かな表記率は,名詞33％，動詞60％，形容詞・副詞68％，接続詞・感動詞90％，合計52％で，ほぼ半分の語がかなで書かれている。

(2)　実質的な意味の単語が文法的手段として使われたり，具体的な意味が抽象化したりすると，かな表記率がたかくなる。

(3)　いくつかの漢字表記が可能な語は，かな表記率がたかくなる傾向がある。

(4)　当用漢字制定による漢字制限の有無は，共時的分析だけからは不明である。

２．中野洋「パソコンによる語の認定処理」

(1)　語彙調査支援のための自動処理プログラムシステムの中核である一貫処理プログラムを作成し，これをパーソナルコンピュータに移植した。

(2)　一貫処理の機能は，単語分割，読み仮名付け，品詞認定，語種認定，活用形変換である。

(3)　このプログラムの特徴は，プログラムと辞書が小さいこと，どのような文でも処理できること，処理が早いことである。プログラムはＣ言語で書いた。ＭＳ－ＤＯＳで128Ｋバイトの容量があるパソコンであれば動く。

(4) 語彙調査データの作成作業における人手の作業と機械処理の比較を行った。その結果，次の3点が明らかになった。①処理精度は，単位切りでは機械でほぼ90%，人手では97%～98%が見込まれることがわかった。これは明らかに人手の方がよい。②処理時間は，機械は人手の10%以下である。③入力パンチ量については，機械は人手の約20%である。

(5) 一貫処理プログラムは，処理方法とともに辞書が重要である。付録として主要な辞書を示した。

3．杉戸清樹　塚田実知代「言語行動を説明する言語表現 ― 専門的文書の場合 ― 」

言語ないし言語行動について言及する言語表記としてのメタ言語表現は，その内容や形式において広範な広がりをもつ。この中で，表現主体がいま行おうとする（ないし，いま行ったばかりの）言語行動について，その言語行動としての種類や機能を明示的に表現するメタ表現も日常的にしばしば観察される。

当面の資料として専門雑誌所載の専門的な文章を対象にこの種のメタ表現の現われ方を記述・検討したところ，次の諸点でいくつかの特徴が指摘された。

①用いられる動詞（句）と，その修飾要素の種類

②言語行動のどの側面に言及するかという言及内容の種類

③文章中でメタ表現の出現する位置

④言及の姿勢（肯定的か，否定的かなど）

⑤そのメタ表現を行った理由の明示的な表示の有無

4．小林隆「方言東西対立分布成立パタンについての覚え書き」

現代方言における東西対立分布が，どのように成立したかを，『日本言語地図』と文献資料により考察した。その結果，東西対立の成立パタンには，東西対立をなす語形の，①放射の中心地，②放射の順序，③伝播の範囲の三つの観点から見て，四つの異なるタイプが想定されることが明らか

になった。また，安部清哉氏の方言分布成立における「四つの層」の仮説が，東西対立の成立過程を説明するのに妥当かどうかを検討した。

5．島村直己「語彙理解度調査の方法 ― テストの信頼性・妥当性，理解尺度の適合性，テスト項目の数 ― 」

一つ一つの語について児童・生徒の理解程度を調査するのに，児童・生徒にそれらの理解程度を評定させるテストを行うことが多い。本稿は，このようなテストの信頼性・妥当性，理解程度の段階数，１回のテストに提出する語の数を検討することを目的として行った調査の報告である。

6．相澤正夫「生きているアクセント規則の検討 ― 東京語の単純動詞とその転成名詞の場合 ― 」

東京語で，起伏式アクセントをもつ単純動詞から派生された転成名詞は，原則として起伏式アクセントを保持する。このアクセント規則を，今日生きている規制と呼んでその有用性を唱える説に対し，いくつかの問題点を指摘して検討を加えた。まず，生きている規則と呼ぶための要件として，この派生パターンの生産力の高さを問題にすべきことを論じた。次に，既成の転成名詞でこの規則が守られているかどうか，社会言語学的な観点から変異の実態を把握し，そこに関与している諸要因の分析を行った。対象データは，『東京語アクセント資料　上・下』から採集した。

7．中田智子「発話分析の観点 ― 多角的な特徴記述のために ― 」

談話の構造を考察する際の分析の単位や方法は，研究の目的によって様々な選択の可能性があるであろう。ここでは，談話を発話機能のやりとり，あるいは連なりとしてとらえる。そして，ｍｏｖｅを分析の単位としながら個々の発話のはたらきや特徴を検討し，それを通して談話の姿を記述することを目指す。そのために，まず発話行為を表わす，または発話行為に関係する日本語の動詞・連語を分析し，発話を多角的に考察する際の観点を蓄積する。次に，それらの観点をもとに，①発話の誘発要因，②話し手・聞き手および両者の関係，③はたらきかけの仕方，④述べられる命題の種類，⑤談話の他の発話との関わり方，⑥その他，という基本的な軸

に沿った分類項目リストを作成し，発話の特徴づけ作業の一つの手段として提案する。

話しことばにおける文の構造の研究

A 目　　的

話しことばの分析は，書きことばに比べてあまり進んでいないのが現状である。話しことばの構文を記述し，その特徴を明らかにすることによって，話しことばの論理とは何かをさぐる手がかりとする。

B 担 当 者

言語体系研究部第一研究室

室長（事務取扱）　宮島達夫（2.10.1まで）　2.10.2 ～ 3.2.15　水谷修　3.2.15から　中野　洋　　研究員　山崎　誠　鈴木美都代

C 本年度の研究経過

1．話しことば資料による分析

①テレビで放送された対談番組（1週間分）を文字化した。（約9時間）

②データを文に切りわける。基準は「話し言葉の文型」(1)によった。

当初の予定では，文節ごとに構文情報をつけ，構文のパターンをしらべることになっていたが，文字化しただけのデータでは，内容の再現性にとぼしい部分があるので，文の意味や談話のながれの把握に関する適切な情報をつけくわえるため，付加情報の検討をした。

2．話法・引用に関する研究

①小説・随筆を中心に用例を集めた。（約17,500例）

②引用の助詞（とされる）「と」をうける述語（主として動詞）の種類による引用文の類型化をこころみた。

3．関連文献の収集・用例カードの補充を一定量おこなった。

C　次年度の予定

この計画は，今年度で終了であるが，１，２ともに次年度からのテーマに吸収させて継続し，まとめしだい，『研究報告集』に投稿する。１に関しては，話し言葉に特徴的な構文をいくつかえらんで記述する予定である。２については，述語と引用句との関係，および，「という」などの，引用をふくむ複合的な形式の用法も考察する予定である。

言語計量調査

テレビ放送の用語調査

A 目　　的

テレビ放送は，新聞や雑誌とともに現代のマス・コミュニケーションの中核を担っている。また，テレビ放送で使われていることばは，国民の言語形成にも強い影響を与えていると言われている。本研究は，このようなテレビ放送のことばの語彙構造，テレビらしい語彙・表現とは何か，その位相差，番組との関係などを明らかにする。

本年度は，５年計画の第３年次として，以下の作業を行った。(a)録画データから録音データを作成する。(b)録音データの文字化・入力を行う。(c)不要データを削除し，単位語データを作成する。(d)一部同語異語の判別を行う。

B 担 当 者

言語体系研究部第二研究室

室長　中野　洋（3.2.16から部長）　　研究員　石井正彦　　研究補助員　小沼　悦

言語体系研究部第一研究室

研究員　山崎　誠

C 本年度の研究経過

1．方法論の検討・開発

① 文字情報（画面情報）の調査法

② 文字化データ作成上の諸問題の整理・検討

③ 番組分類の試行……ＮＨＫ総合・教育

2．調査の実施（音声情報）

④ あらい文字化・入力（カタカナ表記）

⑤　番組名・視聴率の入力

⑥　句点の入力（文のおおまかな認定）

⑦　話者の記号化

⑧　話者情報（個人名・性別・役割）の付与

⑨　ＣＭの確認とその範囲を示す記号の入力

⑩　歌の確認と歌であることを示す情報の入力

⑪　文字化の検査……全体の４分の１

３．語彙の計量的研究に関する探索的研究

「説明文（教科書の文章）の語彙・文法的特徴の調査」……データの整理

４．総括

文字化の検査・確定に予想以上の時間がかかる。そこで，全体の４分の１（４～６月の13週分）について，画面情報とともに，データ作成を先行させることにした。残り４分の３については，文字化検査・確定の前段階のレベルにまでしておくことにする。

現代語彙成立過程の調査

A 目　　的

本研究は，現代日本語の語彙がどのようにして成立したかを明らかにすることを最終目的とする。より直接的な目標は，巨視的にみた場合，どの時点での変化が大きかったか，内容的にみて，現代日本語語彙は，ほかの外国語とちがうどのような特色をもっているか，という点におく。

本年度は，(a)日本語・英語などの基本語彙を，大量の計量調査をもとにして選び出す。(b)これらの初出年代を大型の辞書によってつきとめる。(c)変化のいちじるしい時期，及び変化の内容の比較をする。

B 担 当 者

言語体系研究部第二研究室

部長　宮島達夫（2.10.1から日本語教育センター長）　　研究員　高木翠

C 本年度の経過

1．昨年度末の研究発表会で調査結果を報告したが，その後，日本語（『日本国語大辞典』）と英語（Oxford English Dictionary　新版）の初出年代のみなおしをした。

2．英語の語彙調査（いわゆるブラウンコーパス，のべ100万語）の同表記語（bank, race, right. . . ）の検討をした。

なお，この研究は2年計画ではじめたものだが，1年で中断する。理由は，一方でいちおうの成果をえて，必要があれば発表できる状態になったこと，もう一方で中国語・ドイツ語について調査をすすめる可能性がでてきたことである。すなわち，中国語については，最初，諸橋大辞典をつかっ

たが，これは近代語の用例について，まったく不十分であり，現在中国で進行中の『漢語大詞典』のほうが，はるかに有効であることがわかった。ただ，これは，まだ未完成であり，第2巻までしか調査してない。今後，まだ出版されていない分についても，中国側の協力をえることを考える。
ドイツ語の調査はあきらめていたのだが，コンスタンツ大学のヴィーノルト教授の助力により，グリム辞典の編集責任者から資料の利用について協力するという連絡があったので，できれば，ぜひ対象にくわえたい。

文字・表記の研究の国際的現状の調査

A 目　　的

文字・表記の研究は，その基盤をなす思潮が，最近，国際的に変化していると言われる（文字が言語を貯蔵するという文字観も，表語文字から表音文字への発達という歴史観も，絶対視されなくなった）。本調査は，わが国における国語の文字・表記の調査研究が，そのような国際的思潮とどう関わり合い得るか，検討し，今後の文字・表記の調査研究のありかたを模索する。

本年度は，前年度の成果をもとに，英語で書かれたものを中心として，特に西洋の研究文献の調査・収集に努める。

B 担 当 者

言語体系研究部第三研究室

室長　石井久雄　　研究員　高木　翠

C 本年度の経過

つぎのような文字表記研究書に引用された研究文献を収集すべく努めた。

Sampson, Geoffrey　1985

Writing systems: a linguistic introduction.

Coulmas, Florian　1989

The writing systems of the world.

DeFrancis, John　1989

Visible speech: the diverse oneness of writing systems

Feldbush,Elisabeth　1985

Geschriebene Sprache: Untersuchungen zu ihrer Herausbildung und Grundlegung ihrer Theorie

Anis, Jacques 1988
L'ectiture: theories et descriptions

雑誌における振り仮名の調査研究

A　目　　的

第二次世界大戦後の国語改革運動の標語のひとつに，振り仮名の廃止ということがあった。漢字制限を裏から表現した，このことは，漢字制限とともに新聞では達成された。しかし，例えば雑誌などではどのような状態になっているか，調査のとぼしいのが現状である。本調査は，雑誌における振り仮名の現状を把握しようとするものである。

B　担　当　者

言語体系研究部第三研究室

室長　石井久雄　　研究員　高木　翠

C　本年度の経過

本年度は，雑誌『中央公論』1986年一年間分から約3千箇所，『文芸春秋』同から約5千箇所の振り仮名を採集した。また，振り仮名研究文献を調査収集した。

敬意表現行動の種類と機能に関する社会言語学的研究

A 目　　的

日常の生活場面において他者と接触するとき，われわれはさまざまな対人的配慮をさまざまな表現手段に託して表現している。それらが，いわゆる待遇表現としての言語表現のほかにもひろく及んでいるという見方が最近の研究の基本的な立場である。しかし，具体的にどのような表現手段を敬意表現行動とみなすべきか，それらがどのような待遇表現上の機能をもつものであるかについては，なお検討が不十分なままである。本研究は，この点を実証的に検討する。

B 担 当 者

言語行動研究部第一研究室

室長　杉戸清樹　　研究補助員　塚田実知代

C 本年度の経過

1. 従来の研究を対象にして，どのような事象を敬意表現（行動）として扱っているかを検討した。たとえば『言語学大辞典・世界言語編』（三省堂）の諸言語の記述のうち，待遇表現・敬意表現と解釈しうる記述を収集した。ただし，組織的に整理する段階には至らなかった。
2. 本研究は内容的には，平成元年度まで実施した一般研究「言語行動の目的・機能および対人的な配慮を明示する言語表現についての研究」と関連するところが多い。前研究で継続してきた課題の表現類型の収集整理を，学術専門論文を主たる対象として続行した。
3. 前研究で収集した資料の一部分を扱って，本研究の視点を加えながら報告論文を執筆した(「言語行動を説明する言語表現」杉戸・塚田として『研

究報告集12』に収録）。

また研究の基本的な枠組みについて口頭発表（講演）をする機会もあった（北京日本学研究センター公開講演会「待遇表現への視点」杉戸）。

言語生活における発話の類型と その機能に関する準備的研究

A 目　　的

従来の言語生活の研究は言語行動の形態面のみに注目しており，かつまた数量化の必要からその形態の種類についても十分には把握されていなかった。そこで，①言語行動の形態をさらに網羅的に洗い出し分類すること，②それらの言語行動が当事者間の社会関係・人間関係の形成・維持・発展・崩壊などのためにどのような機能ないしは効果を有しているか，という研究がこれまでの研究の発展として必要になってくる。本研究は，その研究のための方法論をさぐること，また事例的に家庭内における調査などを実施することを目指す。

B 担 当 者

言語行動研究部第一研究室

研究員　尾崎喜光　　研究補助員　塚田実知代

C 本年度の研究経過

1．発話行為の研究との関連について文献的研究をおこなった。
2．対人関係の在り方に注目する社会学・精神医学の研究から，言語使用の対人的効果につきどのような知見が得られているか，文献的研究をおこなった。
3．雑誌（『家の光』）の投書欄から，言語使用とその対人的効果について比較的明示的に書かれたものをデータとして収集した。
4．家庭内の会話の録音ないしは筆記を若干おこなった。
5．所内の研究会（「言語伝達行動に関する対照言語学的研究」〔教材開発室〕）において，研究の枠組み・調査方法等について発表をおこなった。

なお本研究は今年度で終了し，平成3年度から新規でおこなう「発話の伝達効果に関する基礎的研究」に発展的に引き継ぐ。

現代敬語行動の研究

学校生活における敬語の研究

A　目　　的

学校生活において，生徒と教師，生徒と生徒の間で，敬語はどのように意識され，どのように使われているかなど，従来，議論される機会の多い学校生活における敬語の実態を，臨地調査を通じて把握し，国語教育・生活指導などの分野での敬語指導のための基礎資料を得ることを目指す。

B　担　当　者

言語行動研究部第一研究室

室長　杉戸清樹　　研究員　尾崎喜光　　研究補助員　塚田実知代

日本語教育センター第四研究室

研究員　水野義道（大阪府の調査に調査員として協力した）

C　本年度の研究経過

1．以下の各種調査を実施した。

①大阪府下の高等学校での面接事例調査

府立夕陽ケ丘高校・府立泉北高校で6人ずつの生徒グループ，計18グループ 108人について実施。話し相手として，また話題の人物としてグループ構成員が総当り式で質問場面に登場する。2人のペアで面接し，目の前にいる人を相手にした言語行動を収録した。

②東京都下の高等学校・中学校でのアンケート概観調査

都立高校20校，私立高校　2校，都内公立中学校20校で実施。ほぼ回収完了。総計約4,700名。

③山形県東田川郡三川町三川中学校での録音収集

クラブ活動，クラス風景などについて，教師に録音を依頼したほか，調

査員が傍らにいて収録した。

2．調査後のデータ整理・コーディング・入力を進めた。ただし，東京でのアンケート回答を中心として作業は次年度にもちこした。

3．東京都下の高等学校・中学校での面接事例調査は，調査受入れの了解を得て，次年度に実施できるよう正式の依頼まで完了した。

なお，本研究は今年度で終了し，平成3年度から新規でおこなう「現代敬語行動の研究－小集団内の敬語行動」に発展的に引き継ぐ。

漢字仮名まじり文の読みの過程に関する研究

A　目　　的

漢字仮名まじり文の読みの過程とアルファベットの文字体系による読みの過程を比較することによって，漢字仮名まじり文の読みの特徴を明確にする。

研究方法は，当面は，読みの際の眼球運動の測定を用いる。

B　担　当　者

言語行動研究部第二研究室

部長　神部尚武

C　本年度の経過

本年度は，特別研究5年計画の4年次に当たり，次の研究を行った。

1．注視点測定装置に関しては，頭が多少動いても文章の上の注視点の位置を正確にとらえる装置をめざして改良中である。多数の被験者による実験をおこなうためには，この装置を実現させねばならない。

2．大量のデータをもとに，文を読むときの眼球運動の逆行（まえに戻る動き）をおこす要因を調べている。

3．横組，縦組の読みの眼球運動を比較している。

連続音声の音響的特徴についての実験的研究

A 目　　的

従来，子音・母音・音節等の小さな単位にとどまりがちであった音声研究の対象をより大きな単位（語・句・文・談話）へと拡張し，抽象的音韻表示と具体的連続音声の関係を実験を通して明らかにする必要がある。本研究は，そのための理論的検討と基礎的実験を行う。

本年度は，(a)各種音韻理論の検討を行う。(b)対象とする音声現象の選定を行う。(c)予備的実験を開始する。

B 担 当 者

言語行動研究部第2研究室

研究員　前川喜久雄

C 研究経過

1．研究の対象をイントネーションに限定

持続時間制御および喉頭音源のon／off 制御に関しては実験上の困難がおおきいので撤退。

2．母音無声化連鎖とアクセントとの関係についての実験

表層的に観察されるイントネーション形状の決定要因間の相互作用を実験的に検討した。アクセントのある音節とそれに後続する音節が連続して無声化された場合にもアクセントの存在はイントネーションの補償的変化によって知覚されるが無声化連鎖中のアクセントの正確な位置を知覚することは不可能であることが確認された。

3．報告

Production and perception of the accent in the consecutively de-

voiced syllables in Tokyo Japanese,Proceedings of ICSLP90.Vol.1, 517−20,Nov.1990 .

方言文法地図作成のための研究

A　目　　的

『方言文法全国地図』の原稿を作成し，『方言文法全国地図』を刊行することを目的とする。

『方言文法全国地図』は，文法事象に関するこれまでの研究に地理的視野を与えることを目的としている。これまでの方言文法研究は，各方言における個々の文法事象の特徴や文法体系の特徴を，共通語と対照しつつ，あるいは方言独自に記述するものが主であった。本書の刊行の目的は，これまでに記述されている各地の文法事象が，どこに，どのような広がりをもって分布しているかを，全国的な視野で明らかにすることによって，以下に記すような分野の研究あるいは教育に貢献することにある。

(1)　各地の文法体系に関する研究を促進する。

(2)　分布類型論，および，方言区画論に寄与する。

(3)　文法事象の全国分布を言語地理学的に解明する。

(4)　全国共通語の基盤とその成立過程を明らかにする。

(5)　文献研究による日本語の歴史と方言分布との関連について考察する。

(6)　方言社会，あるいは，方言地域出身者に関わる国語教育・日本語教育のあり方について検討する。

B　担　当　者

言語変化研究部第一研究室

研究員　小林　隆　大西拓一郎　白沢宏枝　　非常勤研究員　W. A. グロータース　佐藤亮一　加藤和夫（地方研究員）

平成２年度の地方研究員は次の各氏に委嘱した。

担当地区	氏　名	所属機関（職）
南東北	加藤　正信	東北大学文学部（教授）
関　東	大島　一郎	東京都立大学人文学部（教授）
中　部	馬瀬　良雄	信州大学人文学部（教授）
東　海	山口　幸洋	静岡大学人文学部（非常勤講師）
北　陸	真田　信治	大阪大学文学部（助教授）
近　畿	山本　俊治	武庫川女子大学文学部（教授）
中国Ⅰ	室山　敏昭	広島大学文学部（助教授）
四　国	土居　重俊	（高知大学名誉教授）
北九州	愛宕八郎康隆	長崎大学教育学部（教授）
南九州	田尻　英三	福岡大学人文学部（教授）

C　本年度の研究経過

(1)　『方言文法全国地図』の作成と刊行

第2集「活用編Ⅰ」を作成し，刊行した。活用項目のうち，第2集では次のページの表において太枠で囲んだ45項目を取り上げた。解説書には，「活用編」の方法や各図の説明を記した。「資料一覧」は，第3集「活用編Ⅱ」刊行時にまとめて公表することとし，そのためのデータ整備を行った。

作業の途中で生じた調査結果の不明の点について，地方研究員に問い合わせ，回答を得た。加藤和夫氏には，地図作成を分担してもらった。

(2)　地図作成の機械化についての検討

印刷段階の機械化について，印刷を担当している大蔵省印刷局と検討したが，総合的に見て現在のスタンプ押印方式の方が優れているという判断に達し，当面，スタンプ押印方式を続けることにした。機械化の導入にあたっては，印刷段階のみでなく，編集段階（語形の採用・統合・記号化）も含めた総合的なシステムを考えるべきであり，その検討は将来に持ち越した。

活用形調査項目一覧

項目＼活用形	第2集 否定	終止	連体	命令	過去	第3集 て・なる	意志	推量	受身	使役	仮定(1)	仮定(2)
起きる	001	016		032			060				078	085
寝る	002	017					061					
来る	003	019		036			064	068	072	076	079	086
する	004	020		033			062	069	073	075	080	087
任せる	005	022		038	049						082	
開ける	006	018		034			063			077		
書く	007	023	029		041		065	067			081	088
足りる	008	026										
貸す	009				050							
借りる	010											
見る	011			035								
飽きる	012	021			048							
蹴る	013			037	047							
死ぬ		027									083	
出す					040							
飲む					043							
飛ぶ					044							
研ぐ					045							
行く					046							
買う					051							
建てる					052							
建つ					053							
立つ					054							
(書か)せる		024		039	042		066		074			
(書か)れる		025										
高い	014		030		055	057 058		070			084	089
珍しい						059						
静かだ	015	028	031		056			071				090

数字は調査票における質問番号

(3) 調査文についての反省

調査文については，非現実的な文脈や場面を設定したために予定した回答を得られなかった場合があるが，そのなかには，言語行動とか言語生活といった観点から見ると，興味深いケースが含まれている。そのような情報を各地点の回答カードのなかから収集し，『言語行動・言語生活的観点から見た「方言文法全国地図」資料の注記一覧』（内部資料）としてまとめた。また，地方研究員にも同様の作業を依頼した。これらの資料は，将来の新しい地域差研究のてがかりになるかもしれない。

(4) その他

① 『方言文法全国地図』第1集の評価を行い，今後の研究計画・研究態勢について考えた（平2.10.17　研究部会議）。これと関連して，この地図の企画・編集に携わった元室長・佐藤亮一氏に次の発表があった。

佐藤亮一「『方言文法全国地図・第1集』を刊行して」（『玉藻』22,平2.3）

② 調査担当者による『方言文法全国地図』第1集の合評会，

山口幸洋「『方言文法全国地図1』愛知県の部の検討」（名古屋方言研究会，平3.1.19）

に参加し，調査方法を中心に意見をもらった。

③ 『方言文法全国地図』の編集方法について，主として学史的な観点から論じた。

小林　隆「方言地図の方法について」（『国語学』163,平2.12）

④ 『方言文法全国地図』第2集の紹介を行った（平2.10.19　日本方言研究会会場パネル発表）。

D　次年度の予定

(1) 『方言文法全国地図』の作成と刊行

第3集「活用編Ⅱ」を作成する。表の残りの45項目を取り上げる。地

図化および「資料一覧」のためのデータ整備を行う。

作業の途中で生じた調査結果の不明の点については，地方研究員に問い合わせ，回答を得る。一部の地方研究員には，地図作成を分担してもらう。

(2) 調査文についての反省

平成2年度研究室で作成した資料と地方研究員から報告された情報を総合した資料を作成する。それを，地方研究員に配布し，さらに情報の追加を求める。

(3) 平成2年度刊行した『方言文法全国地図』第2集について，地方研究員に意見を提出してもらう。

方言分布の歴史的解釈に関する研究

A 目　　的

方言分布の歴史的性格を解明し，その成果に基づいて従来の国語史を見直す。ここでは，主に，方言・文献間における語の意味の対応関係，方言の史的位相性，全国方言分布の成立過程の三つのテーマについて明らかにするために，基礎的な問題の考察，資料の整備，新たな調査の企画などを行う。国立国語研究所が，これまで蓄積してきた方言地理学的方法・資料を，今後国語史に生かしていくという，発展的継承のための研究と位置付ける。

B 担 当 者

言語変化研究部第一研究室

研究員　小林　隆　白沢宏枝

小林は仕事の全体を担当し，白沢はアルバイターの管理など事務的作業に協力した。

C 本年度の仕事

(1) 方言・文献間における語の意味対応についての考察

文献国語史と方言地理学との対照から語史の構成を行おうとする場合，同一語形であるにもかかわらず，文献と方言とで意味が対応しない現象がしばしば確認され，問題となっていた。しかし，この問題を詳しく検討するためには，現在公にされている方言地図の項目では著しく不十分であり，体系的かつ詳細に意味項目を設定した地図が必要となる。そこでまず，『日本言語地図』の身体項目を中心に，関連意味項目（例えば，〈下顎〉に対して〈上顎〉〈頬骨〉など）の全国方言分布地図を作製する。そして，その資料を，意味的に問題のある語史の記述に役立てる。

さらに，この資料を利用して，文献と方言との語の意味対応のパターンを整理し，不対応が生じた原因について概括的に考察したい。

なお，作製する地図の資料として，昭和61年度に通信調査により，50項目1400地点分の回答を収集している。この地図は，現在，通信調査法で大規模な方言分布調査が可能かどうかという実験的意義ももつ。

本年度は，関連意味項目地図の作成を進めた。

また，『日本言語地図』の身体項目について，その関連意味項目を網羅的にあらいだし，かつ，直接意味に関連の無い項目にも視野を広げるために，『日本言語地図』に現れた方言形と同じ形態が他にどのような意味で使われるかを，文献（『日本国語大辞典』）と方言（『日本方言大辞典』）で網羅的に調査した。

(2) 方言の史的位相性についての考察

従来，方言を国語史の資料として用いる場合，それが位相（文体・階層）上どのように位置付けられるかということについては，基本的なことでありながら十分おさえられていなかった。方言は，基本的に庶民階層の口頭語史を反映するものであろうと考えるので，その点を明らかにしたい。もし，それが当たっているなら，方言による国語史は，これまでの文献による国語史を位相的に見直し，補強することに役立つはずである。具体例において，文献と方言をからみあわせつつ，位相的な視野の広がりをもった語史の記述も行ってみたい。

本年度は，〈馬〉の歌語であるはずのコマが，方言では〈牡馬〉の意味に限定されて広く現れることの理由を探り，歌語と方言との位相面での関係を通時的に考えようとした。そのために，①関連研究論文の収集，②文献上の用例採集，③馬の文化史についての情報収集，などを続けた。

(3) 全国方言分布の成立過程についての考察

これまで，国語史と言えば中央語史を指したが，日本全土にわたる国語史の記述が理想であることは，言うまでもない。そのためには，全国方言の形成史について知ることが必要となろう。そこで，まず，『日本

言語地図』にみる現代の全国方言分布と，中央文献資料とを対比することにより，前者の史的傾向を概括的に探ることにする。それを一つのてがかりに，全国方言分布がいかにつくりあげられてきたかという，形成史への考察に及びたい。

本年度は，東西対立分布の成立過程について考察を進めた。『日本言語地図』と文献資料をもとに，東西語形の①放射の中心地，②放射の順序，③伝播の範囲の三つの観点から見た類型を抽出することを主要な目的とした。結果は，次に報告した。

小林　隆「方言東西対立分布成立パタンについての覚え書き」（国立国語研究所『研究報告集』12，平3.3）

次に，平成2年度科学研究費総合研究（A）「日本人とその文化の地域性」（代表：大林太良）を通じて，関連諸科学との交流により広い角度から，方言分布も含めた日本文化の地域差の成立について考えようとした。結果は，次に発表した。

小林　隆「方言形成史研究の展望と課題」（上記科研費報告書『日本人の文化とその地域性』平3.3）

また，この科研費では上記の考察の基礎資料を充実させるために，徳川宗賢氏（大阪大学教授）と共同で，全国規模の新たな方言分布調査の計画を検討した。特に，本年度は，調査計画全体について見通しを得るとともに，調査項目について考え，その選定のもととなる次のような資料の作成を試みた。①語別研究文献数一覧，②抄物・語別研究文献数一覧，③主要方言地図調査項目一覧，④『物類称呼』項目別方言数一覧，⑤時代別特有語一覧。

D　次年度の予定

(1)　方言・文献間における語の意味対応についての考察

『日本言語地図』の関連意味項目地図の作製を続ける。

『日本言語地図』に現れた方言形と同じ形態が他にどのような意味で

使われるかを，文献(『日本国語大辞典』) と方言（『日本方言大辞典』）で網羅的に調査する作業も続ける。

(2) 方言の史的位相性についての考察

歌語コマをめぐる上記の問題について，調査・考察を続ける。

(3) 全国方言分布の成立過程についての考察

周圏分布の考察に入る。特に，周圏分布をなす語の文献上の位置について調査する。

また，新しい全国調査については，項目・方法のおおかたを確定したい。

自然科学用語の語史研究

A 目　　的

幕末・明治期には，それ以前の時代の日本語の語彙に著しく欠けていた自然科学関係の用語が多く作られたり，中国から取り入れられたりした。それらの語の歴史については，ほとんど明らかにされていない。本研究は，数学・物理学・化学・生物学・天文学・地学における用語，約400語の定着してゆく歴史を明らかにする。

本年度は，(a)自然科学関係の専門書・概説書・啓蒙書から用例を採集する。(b)明治時代の専門語辞典などから該当する語の見出しと語釈を調査する。(c)天文学について，報告書の原稿の執筆を始める。

B 担 当 者

言語変化研究部第二研究室

部長　飛田良文　　室長　梶原滉太郎　　研究補助員　中山典子

C 本年度の作業

1．　自然科学関係の専門書・概説書・啓蒙書から用例を採集した（数学・物理学・化学・生物学・天文学・地学についておこなった）。

2．　報告書の原稿執筆をはじめた。

3．　近代語の研究資料調査の一環として，天理図書館所蔵の漢訳洋書などについて語学的および書誌的な調査をおこなった。調査に当たっては同図書館閲覧係の方々のお世話になった。

人文関係用語の訳語索引の作成

A　目　　的

本研究は，幕末から昭和までの英和辞典61種を使って，人文科学関係の英語見出し300語の訳語の変遷を明らかにする。

国内では，森岡健二（『近代語の成立』，『語彙の形成』），松村明（『洋学資料と近代日本語の研究』），飛田良文（「げんご〔言語〕」『講座日本語の語彙』第10巻所収）などによって『英華字典』や『英和和英語林集成』などの訳語について断片的な研究はあるが，多くの辞典を系統的に研究したものはない。また，国外でこういう研究が行われたこともないと思われる。

本年度は，訳語索引の整理基準の作成をおこなう。そのため，(a)訳語の読み方の調査をおこない，索引の見出し形を決定する。また，(b)訳語の見出し一覧の作成（コンピュータ入力）をおこなう。

上記(a)の作業をおこなったうえで，英語見出し100語（訳語数7,000語）について(b)の作業をおこなう。

B　担　当　者

言語変化研究部第二研究室

部長　飛田良文　　室長　梶原滉太郎　　研究補助員　中山典子

C　本年度の作業

1．　訳語索引の整理基準の作成をおこなった。

2．　索引の見出し形を決定するため，訳語の読み方の調査をおこなった。その内訳をいえば，英語見出し300語のうち100語の作業を完了した。

『花柳春話』の文体別使用語彙の比較研究

A　目　　的

口語文の成立する以前に主流をしめていた二つの文体，すなわち漢文直訳体と和文体とが現代語の源流として，どのような役割を果たしたかについては全く明らかにされていない。『花柳春話』は，明治初期の代表的翻訳小説で，漢文直訳体と和文体の二通りの翻訳がある。本研究は，この二種類の文体に現れる語彙を比較し，現代語とのつながりを探る。

B　担　当　者

言語変化研究部第二研究室

部長　飛田良文　　研究補助員　中山典子

C　本年度の作業

本年度は，漢文直訳体の漢語は和文体ではどのように対応しているか，実態を調査するため，対応語比較表を作成する。そのために以下の作業をおこなった。

1．　対応語用例集の点検。

2．　対応語比較表作成作業の開始。

漢字の学習指導の実態に関する調査研究

A　目　　的

本研究は，漢字の学習指導の実態に関して，これまで行ってきた研究の結果を整理して，必要な資料・統計を整えることを目的とする。

本年度は，(a)漢字の習得度調査の結果を分析して，児童・生徒の漢字の学習方略を明らかにする。(b)漢字の学習指導に関するアンケート調査の分析を行う。(c)漢字の学習指導に関する雑誌・論文を整理して，漢字の学習指導法を分類する。

B　担　当　者

言語教育研究部第一研究室

室長　島村直己　　研究補助員　小高京子

C　本年度の作業

1．　科研費「常用漢字の学習段階配当のための基礎的研究」（1982～1984年度）で行った漢字の習得度調査の結果を，さらに分析し，結果の概略を『計量国語学』に発表した。

2．　科研費「漢字情報のデータベース化に基づく常用漢字の学習段階配当に関する研究」（1986年度～1988年度）で行った漢字の学習指導に関するアンケート調査の分析を行い，その一部を，全国大学国語教育学会誌『国語科教育』，および『教科研究』（教育出版）に発表した。

3．　科研費「漢字の学習指導法に関する文献目録の作成とそれに基づいた漢字の学習指導法の分類」（1989年度）の成果を元にして，漢字の学習指導法に関する文献目録をだいたい作成した。また，雑誌論文の複写をほぼ終えた。

※なお，これらの成果をまとめて，報告書を執筆する。

児童・生徒の語彙力調査のための基礎的研究

A　目　　的

近い将来，児童・生徒がどのような語をどの程度理解しているか調査することを計画している。本研究は，そのために，調査語彙の選定と語彙力の測定方法とに関して基礎的な研究を行うことを目的とする。

本年度は，(a)これまで提案されてきた教育基本語彙集を整理して，教育基本語彙データベースを電子計算機上に作成し，調査語彙のおおよその範囲を確定する。(b)語彙力を測定するために，どのようなテスト方法が適切であるかを検討する。

B　担　当　者

言語教育研究部第一研究室

室長　島村直己　　研究補助員　小高京子

C　本年度の作業

1．　調査語彙の選定に関する基礎的研究

科研費「漢字情報のデータベース化に基づく常用漢字の学習段階配当に関する研究」（1986年度～1988年度）で作成した教育基本語彙データベースを拡充するため，阪本一郎『教育基本語彙』『新教育基本語彙』の校正作業を行った。また，著作権の問題について，庶務課を窓口にして文化庁と協議して検討した。

2．　語彙力の測定方法に関する基礎的研究

語彙力を測定するために，どのような方法が適切であるか，実際にテストを行って検討する。また，コンピュータに入力してある課題作文データを元にして，語彙について分析する。

① 調査結果を『研究報告集12』に発表した。

② 作文を追加入力して，全部で3課題・3学年・各30人分の作文270編のデータに整え，単位分割，品詞コード・語種コードの付与までだいたい終えた。

幼児・児童の書きことばの獲得に関する調査研究

A 目　　的

本研究は，幼児・児童の書きことばの獲得を可能にしている，社会的・文化的な状況の構造・機能を明らかにする。幼児期初期の疑似的な文字の使用過程，保育者との相互作用過程，及び幼稚園・保育園・小学校における文字を媒介にした伝達活動を対象にして，幼児・児童の書きことばの使用とその概念的把握の発達的変化を明らかにする。

本年度は，(a)対話資料を収集する。(b)テスト型資料を収集する。

B 担 当 者

言語教育研究部第一研究室

研究員　茂呂雄二　　研究補助員　小高京子

C 本年度の経過

1．幼児の文字使用場面について，以下の対話場面に注目して資料を収集する。

　a．幼児と保母との共同の絵本読み

　b．幼児の一人の読み

　c．一斉保育場面の対話資料の収集と分析

　a．b．については週1回の参加観察で20時間分の音声映像資料を収集した。c．については5時間分の資料を収集した。

2．①を以下の観点から分析する。

　a．読みについて

　　相互作用の型の特定，保母の援助，共同読みと一人の読みの違いを検討するため，文字化の作業中である。

b．保育場面について

一般的な相互作用の型，書きことばに関する・書きことば的な“スタイル”がどのように保母→幼児の働きかけに混入するのかを検討する。このためビデオ資料の追加収集を検討中である。

3．89年度に収集した先行研究をまとめる。

a．プレリテラシーについて

リテラシー関連の文献も含めてカード化した

b．研究方法に関して

関連諸研究の文献収集をした。

資料評価のための探索的研究

A 目　　的

言語研究において資料を的確かつ高度に利用するためには，言語学における資料のありようそのものを研究対象とすることが必要である。本研究は，研究所に蓄積された資料を調査・整理し，あわせて，それらの資料にまつわるさまざまな情報を広く収集することによって，資料の特性を把握し，資料活用の可能性を探ることを目的とする。

本年度は，(a)所内蓄積資料を調査し，実験的なデータベースを作成する。(b)所外の資料活用法を調査する。(c)言語研究における資料のありかたについて考察する。

B 担 当 者

情報資料研究部第一研究室

室長（事務取扱）江川　清　　研究員　井上　優　　研究補助員　辻野都喜江

C 本年度の作業

1．所内蓄積資料の調査及び資料作成。

2．個人所有の所外データについて数人の研究者を対象に調査。

新聞における国語関係記事の蓄積と活用法に関する準備的研究

A　目　　的

昭和24年から継続して蓄積されている『新聞所載　国語関係記事切抜集』は，研究所にしかない資料である。その年々のことばについての動向を知るための貴重な資料である。しかし，蓄積の形態が，日付順に製本されているだけのものなので利用しにくい。本研究は，これに索引をつけ，検索できるようにし，資料としての活性化をはかることを目的とする。

本年度は，(a)国語関係の新聞記事を平成元年度作成のマニュアルに基づいて収集する。(b)国語研究所所蔵の新聞記事を対象に，「国語関係記事台帳」を試験的に作成する。(c)新聞記事の内容分類を行う。

B　担　当　者

情報資料研究部第一研究室

室長（事務取扱）　江川　清　　研究員　井上　優　中曽根　仁　　研究補助員　辻野都喜江

C　本年度の作業

1．新聞記事の収集・蓄積を継続した。

2．新聞記事の収集・蓄積・保存に関する作業マニュアルを作成した。

3．『国語関係記事台帳』の内容を検討し一部作成した。（『台帳』の内容は研究部会議で報告した）

4．『国語年鑑』（1979～1988）所収の新聞記事一覧を『台帳』の形式で計算機に入力した（→『国語年鑑・新聞記事一覧台帳』）（辻野）。

5．以上の研究成果の一部を，「『国語関係記事台帳』について」（井上・中曽根・辻野），「『国語年鑑』の新聞記事一覧のデータベース化につ

いて」（辻野）のタイトルで公表した。（3月7日，「文字・画像データベースとその利用に関する総合的研究＆文字・画像データベースとその利用に関する研究」研究会，於統計数理研究所）

社会言語学資料についてのデータベース構築に関する準備的研究

A　目　　的

これまでに研究所の内外で行われてきた各種の社会言語学的調査研究によって，膨大な量の資料が蓄積されてきている。本研究は，これらの調査資料の有効的活用をはかるためのデータベース構築に向けて，その準備的調査研究を行うことを目的とする。

本年度は，(a)所内蓄積データの調査・整理を継続して行う。(b)データベース構築の問題点の整理検討を継続して行い，また，実験的なデータベースを試作する。(c)所外データの調査を継続して行う。

B　担　当　者

情報資料研究部第二研究室

室長　米田正人　　研究員　熊谷康雄　　研究補助員　礒部よし子

C　本年度の研究経過

1．所内蓄積データの調査・整理

所内蓄積データの一部分について調査した。

2．データベース構築に関する問題点の整理検討（継続）と実験的なデータベースの試作

試作版完成には至らなかったが，問題点の検討・整理を行い，データベースの設計に着手した。

3．所外データの調査を継続

所外データについての調査を継続した。

文献情報の収集・整理法に関する準備的研究

A 目　　的

本研究は，国語学及び関連諸科学の研究動向を把握し，より効率的に文献情報を提供するために，文献・研究情報全般について収集法及びその整理法の検討を行うことを目的とする。

本年度は，(a)文献・研究情報の収集・整理に関する基準案を一部作成する。(b)文献目録の機械入力処理システムを構築し，本格的な機械処理実施への目途をつける。一部分試行する。

B 担 当 者

情報資料研究部第二研究室

部長　江川　清　　主任研究官　伊藤雅光（3.1.1から）　　研究員　田原圭子　伊藤菊子

C 本年度の研究経過

1．収集・整理法に関する準備的研究

① 文献目録の機械入力処理システムを構築し本格的な機械処理実施への目途をつけるために，一部分試行した。

② 典拠ファイル（著編者名，発行所名，雑誌名）を作成した。

2．国語年鑑の作成

① 文献・研究情報を収集・整理し，「国語年鑑」1990年版を編集・刊行(1990.11月)した。一年間の動向を知る手がかりとして，1990年版『国語年鑑』に採録した文献及び研究情報の冊数（点数）または件数を，目次に従って示す。

第１部文献　（　）括弧内は前年の数である。

刊行図書　総数1,449冊（1,454冊）

国語一般	49（29）	マス・コミュニケーション	2（3）
国語史	22（20）	国語問題	4（4）
音声・音韻	11（11）	国語教育	161（124）
文字・表記	31（31）	外国人に対する日本語教育	29（17）
語彙・用語	68（66）	言語（学）その他	54（50）
文法	26（20）	辞典・用語集	
文章・文体	20（33）	辞典・用語集	175（195）
方言・民俗	75（76）	索引	25（25）
ことばと機械	11（18）	参考資料	147（127）
コミュニケーション		国語研究資料	199（253）
コミュニケーション一般（言語生活）	40（46）	1989年中のもの	計1,219(1,225)冊
言語技術（話し方・書き方）	70（77）	追　補（1988年12月以前のもの）	計230(229)冊

雑誌論文　総数3,253点（3,545点）

国語（学）	140（182）	コミュニケーション	111（136）
国語史	95（68）	マス・コミュニケーション	71（79）
音声・音韻	101（110）	国語問題	85（69）
文字・表記	99（93）	国語教育	724（698）
語彙・用語	372（534）	外国人に対する日本語教育	170（130）
文法	242（257）	言語（学）	279（358）
文章・文体	238（187）	国語研究資料	42（38）
古典の注釈	93（105）	書評・紹介	51（69）
方言・民俗	132（165）	1989年中のもの	計3,093(3,360)点
ことばと機械	48（82）	追　補（1988年12月以前のもの）	計160(185)点

採録図書発行所一覧（506件），採録雑誌発行所一覧（633件）

第２部名簿　国語関係者名簿（国内1,900人，国外85人），各学会・関係諸団体（81団体）の活動状況ほか。

第３部資料　人名用漢字，外来語の表記（案），平成元年度文部省科学研究費による研究題目（303件）・刊行費補助金による学術図書等（31件）の一覧ほか。

なお，次の資料データの補充及び修正を行った。

(1)国語年鑑掲載文献著編者名よみがな辞書'90（21,329件）

(2)国語年鑑掲載文献著編者別資料'90（1986年版～）

② 1991年版作成の準備をした。

3．資料集「国語学関係刊行書目」作成のための準備的研究

分類配列のためのコード表を作成し，細分類及び複数分類の試行をした。

大量日本語データの蓄積と検索に関する基礎的研究

A　目的・意義

大量日本語データを研究用資料として有効に使用するため，コンピュータによる蓄積・処理・情報交換の方法を研究する。

本年度は，(a)機械辞書の校正と修正を行う。(b)新聞ＫＷＩＣ用例集の最終修正を終え，新聞・漢字データのデータベース化を試みる。(c)コンピュータ切り替えに伴う移行処理に当たる。

B　担　当　者

情報資料研究部電子計算機システム開発研究室

室長（事務取扱）　江川　清　　研究補助員　米田純子

C　本年度の研究および作業

1．新聞ＫＷＩＣ

①　引き続き修正作業を行った。

2．漢字総合辞書

① 作業行程をまとめるための辞書の修正および点検を行った。

② 人名漢字追加に伴う情報の付加を行った。

③ 計算機システムが新ＪＩＳ対応になった場合に速やかに移行できるように資料作成を開始した。

3．電子計算機室運営管理

①コンピュータの切り換えに伴う作業を行った。

②次回導入へ向けて資料の収集を行った。

国語辞典編集のための用例採集

A　目　　的

①国定読本用語総覧の編集刊行（継続）

国語辞典編集のための用例採集の一環として，明治期における標準語の実態を明らかにする。

本年度は，「国語読本用語総覧５」（国定読本第３期後半）を刊行する。

②スカウト式用例採集の実施（継続）

国語辞典編集のための用例採集の一環として，全数調査で達成できない低頻度語の採集を行う。

本年度は，(a)雑誌・新聞・文学作品を対象に２２万語程度の採集を行う。(b)用例の蓄積・検索方式について検討し，実験の上，方式決定する。

B　担　当　者

主幹　飛田良文　　室長　木村睦子　　研究員　藤原浩史　　調査員（非常勤）　飯島　満　伊土耕平　貝美代子　菅野　謙　久池井紀子　高橋美佐林　　大　山田雅一

C　本年度の作業

１．国定読本用語総覧の編集刊行

①　「国定読本用語総覧５」（３期ハナハト読本　と～ん）の刊行
90年６月

②　「国定読本用語総覧６」（４期さくら読本　　あ～つ）の原稿作成
本文部分は完成している。

２．スカウト式用例採集

①　用例採集

約18万語を目標に採集を行っている（2月末日回収予定）。

90年の暮れにスカウト式用例採集に関する検討会を開いて通信研究員の意見を聞いた。調査対象は次の通りである。

a．雑誌　　「太陽」明治42年，大正6年　計13冊

b．文学作品　国研に復刻本のあるものを先に処理している。

c．新聞　　「朝日新聞」の縮刷版を拡大コピーして使ってみているが，読みにくいとの意見が出ており，古い所は使えないようである。

② 所在索引作成のための準備作業

スカウト方式で採集（マーク入れ）した用例について所在索引を作る目的で，平成3年度概算要求に外注入力費を計上したが，それに先立ち，辞典編集室内で試験的に以下の作業を行った。

a．採集箇所の入力

b．インデックス付与

検索のキーにするため，ひらがなでインデックスを付ける。長い単位は分割し，活用語尾は終止形に統一し，読みが一つに定まらない場合は併記する。

c．インデックス・ファイルの作成

③ 検索システム作成

インデックス・ファイルのみ機械可読形にし，原文は光ディスクに画像入力して，

検索キー入力 → インデックス・ファイル検索
→ 出典番号等の画面表示 → ユーザ選択
→ 光ディスクアクセス → 出力（画面または紙）

というシステムを想定している。現在プログラム作成中である。

日本語の対照言語学的研究

A　目的と内容

本研究は，「外国語としての日本語の研究」の中心的分野をなすものであり，日本語を外国語としてとらえ，諸外国語と対照しつつ記述的研究を行おうとするものである。本年度は次の2テーマを実施した。

①　日本語音声の韻律的単位に関する記述的研究

本研究は，日本語音声の韻律についての研究のうち，韻律の時間軸上の単位であるモーラ，シラブルについて，その持続時間が話し方のスタイル，モーラ，シラブルの文中の位置関係等によりどう変動するかを調べることを目的とする。

本年度は，(a)モーラ，シラブルの発話中の持続時間に関する先行研究文献を収集し，まとめる。(b)音声資料・分析の方法を確立する。

②　単語の意味記述に関する対照語彙論的研究

辞書等で単語の意味を説明する手段として用いられる説明言語には，普通の言葉とは違う特徴が観察される。この種の特性・クセを明らかにしておくことは，語彙・意味研究の前提として不可欠である。本研究は，日本語を日本語で説明した一言語辞書，外国語を日本語で説明した二言語辞書の訳語・語釈を対比させながら，説明言語の特性を明らかにすることを目的とする。

本年度は，(a)前年度までに採集した説明言語を対比させつつ，分析を試みる。(b)分析結果に基づいて報告書の原稿を執筆する。

B　担　当　者

日本語教育センター第一研究室

室長　鮎澤孝子(①)　　研究員　相澤正夫(2.7.1から主任研究官)(②)

C　本年度の研究経過

①　日本語音声の韻律的単位に関する記述的研究（3年計画1年次）

日本語の発話中でのモーラとシラブルとの関係，およびそれぞれの持続時間の変動について，分析対象とするデータの収集と分析方法の考察を続けた。

②　単語の意味記述に関する対照語彙論的研究（5年計画5年次）

『日独仏西基本語彙対照表』（国研報告88）の語彙分布と訳語形の関係について調査を続けた。一言語辞書と二言語辞書を対比させながら，語釈・訳語の与え方の異同について調査を続けた。報告論文の執筆は次年度以降の課題とする。

日本語教育のための述部からみた文構造の研究

A　目　　的

日本語文の核となるのは，述部（動詞，形容詞，形容動詞，名詞＋だ）である。個々の述部をめぐる名詞句の現れかたに関する情報は，外国人日本語学習者にとって不可欠のものであるが，従来これを具体的・体系的に記述したものはない。本研究は，実際の用例に基づき，この点を明らかにし，日本語教育のための基礎資料を得ることを目的とする。

本年度は，３年計画の第３年次として，(a)用例の補充採集を行う。(b)『日本語教育のための基本語彙調査』（国立国語研究所報告78）で選定された基本動詞を中心に，用例集を作成する。

B　担　当　者

日本語教育センター第一研究室

室長　鮎澤孝子　　研究員　相澤正夫（2.7.1から主任研究官）

C　本年度の研究経過

岩波ジュニア新書を中心に，個々の述部をめぐる名詞句等の現れ方について用例採集を続けた。また，『日本語教育のための基本語彙調査』（国研報告78）で選定された［二字漢語（体の類にある）＋スル］動詞を中心に，新聞（解説欄）から採集した用例の整理を続けたが，用例集の完成には至らなかった。今後も用例集作成の作業を継続したい。

日本語教育の内容と方法についての調査研究

－４年制大学における日本語教員養成の分野を対象とする－

A　目　　的

本調査は，外国人に対する日本語教育の現状と過去の実績について，教授法，教育内容，教材に関する問題点を収集整理し，日本語教育に関する研究上の方法論と具体的対策を検討し，日本語教育の内容，方法の向上改善に資する基礎的な研究資料を得ることを目的とする。

本年度は，「日本語教育研究連絡協議会」を１回開催する。３年間継続して協議してきた内容を整理し，小冊子にまとめ関係者に配布する。

B　担　当　者

日本語教育センター第一研究室

室長　鮎澤孝子　　研究員　相澤正夫（2.7.1から主任研究官）

C　本年度の研究経過

国立・私立計17大学の担当者を招いて，日本語教育研究連絡協議会を１回（1990年11月）開催し，この分野に関連する諸問題についてさらに協議した。過去３年間の協議内容を『日本語教育の内容と方法についての調査研究　資料(7)　４年制大学における日本語教員養成の現状』にまとめ，年度内に関係機関等に配布した。

協議会出席者は以下のとおりである。

越前谷明子　愛知教育大学教育学部総合科学日本語教育コース助教授
遠藤織枝　　文教大学文学部日本語日本文学科助教授
大倉美和子　大阪外国語大学外国語学部日本語学科助教授
奥田邦男　　広島大学教育学部日本語教育学科教授（学科主任）
草薙　裕　　筑波大学文芸・言語学系教授

工藤真由美　横浜国立大学教育学部日本語教育講座助教授
窪田富男　東京外国語大学外国語学部日本語学科教授
小出詞子　姫路獨協大学外国語学部日本語学科教授（学科長）
駒井　明　南山大学外国語学部日本語学科教授（学科長）
才田いずみ　東北大学文学部日本語日本文学科助教授
椎名和男　杏林大学外国語学部日本語学科教授
徳川宗賢　大阪大学文学部日本学科教授
戸田昌幸　麗澤大学外国語学部日本語学科助教授
豊田豊子　明海大学外国語学部日本語学科教授
中村妙子　国際基督教大学教養学部語学科助教授
中村良廣　筑紫女学園大学文学部日本語・日本文学科助教授
名柄　迪　上智大学比較文化学部日本語・日本文化学科教授（科長）
飯沢隆夫　文部省学術国際局教育文化交流室日本語教育係長
柳沢好昭　文化庁文化部国語課専門職員
今井信光　神田外語学院
鎌田一二　文化外国語専門学校
中西郁夫　青山スクールオブジャパニーズ
山本弘子　カイ日本語スクール

日本語と英語との対照言語学的研究

－日本語・英語の構造とその運用について
言語間の伝達における諸問題の調査・分析－

A　目　　的

外国語を習得するためには，対象言語の論理的な構造（狭義の「文法」）だけでなく，その言語をコミュニケーションの手段として使う際の心的態度，表現意図などの理解と，運用能力の開発が必要である。本研究は，英語を母語とする学習者が日本語を学習する際に直面する障壁の一つであるそれらの側面について，日英両語の比較対照を行い日本語教育の充実発展の基礎資料とすることを目的とする。

本年度は，前年度までに収集した資料をさらに充実させ，情報伝達理論の現状に照らし合わせて報告書の原稿を執筆する。

B　担　当　者

日本語教育センター第二研究室

室長（事務取扱）　西原　鈴子

C　本年度の作業

1．日・英語の意味論および語用論に関する理論的研究

特に「文脈」の定義と解釈に関する文献的探索を行った。

2．日・英語の構造とその運用について，言語間の伝達における諸問題の調査研究

a．副詞・指示詞の日英対訳資料の補充収集と整理を行った。

b．日英語修辞法の対照を目的として，文（段落）の表出順序に関する資料を収集，一部整理した。

日本語とスペイン語との対照言語学的研究

A　目　　的

本研究は，スペイン語を母語とする日本語学習者が直面する問題点を言語学的に解明し，教材開発等への応用に備えるべき基礎資料を提供することを目的とする。

本年度は，(a)先行研究文献の探索と収集を行う。(b)専門家による研究手段模索のための研究会を開催する。(c)研究トピック別ワークショップを開催する。

B　担　当　者

日本語教育センター第二研究室

室長（事務取扱）　西原鈴子　　非常勤研究員　青山文啓　大倉美和子　野田尚史　三原健一　メサ・ビルヒニア　高垣敏博　山蔭昭子

C　本年度の作業

1．日西対照研究に関する文献調査を行った。

2．次年度以降の研究計画の立案と検討のための会合を開催した。

簡約日本語の創成と教材開発に関する研究

A 目　　的

国際共通語としての日本語を世界により広く進めるためには日本語のむずかしい点を取り払いエッセンスとしての日本語を創り出す必要がある。これを「簡約日本語」と称する。本研究はこの「簡約日本語」を創成し，その教材化を図ることを目的とする。

B 担 当 者

日本語教育センター第二研究室

客員研究員　野元菊雄　　研究員　川又瑠璃子　　事務補佐員　義本真帆

C 本年度の研究

本年度の研究は次の手順によって進められた。

(1)基本文型の決定　・現行の初級日本語教科書17種の中から文型を提出順に取り出し，これに基づき文型を決定する。

(2)文法の決定　・上記日本語教科書の中から文法事項を取り出し，文型と共にデータ・バンクとして蓄え，これに基づき文法事項を決定する。

(3)語彙の決定　①暫定的に選出した2,000語のうち，多義語について意味の設定をし，新聞ＫＷＩＣ，言語生活ＫＷＩＣにより文脈付き用例を採集・分類する。

②動詞と形容詞について活用形の使用度を調査する。

③多義語の意味を決定する。

(4)教材作成　上記の結果をふまえ，予定する10ステップのうちのステップⅠ・Ⅱの教授項目を作成する。

簡約日本語による教材として，本年度はステップⅠ及びⅡの項目を決定した。

ステップⅠ

Ⅰ．第一課（～デス。～マス。）

1．名詞文

2．形容詞文・形容動詞文

3．動詞文

4．存在文

5．助詞

を・に・か・まで・で

Ⅱ．第Ⅱ課（表現意図）

1．希望の表現

2．意志の表現

3．消極的行為欲求の表現

4．積極的行為欲求の表現

ステップⅡ

Ⅲ．第三課（場面）

1．あいさつ

2．紹介など

3．買い物など

4．数

Ⅳ．第四課

（デス・マスのその他の形）

1．デス・マスの活用

2．他の動詞がつづく形

3．敬語

4．名詞

上記各項目の文型・文例ほか基礎データについての報告は割愛する。

D　今後の予定

平成3年度からは，これらの成果をベースに引きつづき基礎データの蓄積を図り，第3ステップ以降の教材開発を3年計画で開始したいと考えている。

日本語教育に関する情報資料の収集・提供

A 目　　的

第二言語としての日本語教育を有効に行うために，これまでの国内・国外における日本語研究，日本語教育の実態及び日本語教育に関する教科書・副教材，視聴覚教材などの情報資料を収集整理し，今後の研究及び教育の参考資料として提供し得るよう整備することを目的とする。

本年度は，(a)日本語教育センター資料室のための資料を整備する。(b) 2 種の文献索引を作成する。『日本語教育・学会誌・機関誌掲載論文等文献一覧』『日本語教育文献索引』(c)情報収集のための講演会を開催する。

B 担 当 者

日本語語教育センター第二研究室

室長（事務取扱）　西原鈴子　　非常勤研究員　小出いずみ　澤木幹栄

日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育研修室

研究補佐員　早田美智子

C 本年度の作業

3．　日本語教育に関する情報資料の収集・提供

(1)　日本語教育の実態を把握するための講演会を，カナダ・トロント大学教授中島和子氏を招いて開催した。

(2)　国内外の日本語教育関係資料の収集・整理，および資料室の管理・運営を継続した。

(3)　1989年に刊行された日本語教育関係機関誌等文献資料一覧の作成を行った。

(4)　1987年に刊行された日本語教育関係文献資料のキーワードおよび著

者名による索引一覧の作成を行った。

日本語とタイ語との対照言語学的研究

－挨拶言葉とその周辺表現に関する社会言語学的研究－

A　目　　的

本研究は，日本語とタイ語における挨拶言葉及びその周辺表現について調査研究し，社会的・文化的背景の違いによる差異を明らかにする。

本年度は，日本語とタイ語の社会言語学分野並びに関連する文化・歴史・価値観・国民性等についての資料・文献を収集し，人間が出会った時の様々な場面の状況とその時の言語行動を集めて分析する。

B　担　当　者

日本語教育センター第三研究室

室長（事務取扱）　西原鈴子（2.10.1まで）　宮島達夫（2.10.1から）

主任研究官　堀江プリヤー（2.10.1から）

C　本年度の経過

上記研究を進めるための資料・文献収集を行なった。

日本語と中国語との対照言語学的研究

A　目的と内容

格関係の表示の大きな部分を語順にたよる中国語を母語とする学習者が日本語を学ぶ際には，日本語の格助詞に代表される格関係の表示法を習得することが大きな問題となる。中国語の格関係の表示法と日本語の格関係の表示法との対応を明らかにすることができれば，中国語話者に対する日本語教育にとって有効な基礎知識となる。本研究は，その対応を明らかにするために有効な格関係の分類を考察する。

本年度は，(a)用例の採集を継続して行う。(b)格関係の全体の対応を明らかにするために有効な格関係の分類を求める。(c)用例・分類について，インフォーマントによるチェックを行う。

B　担　当　者

日本語教育センター第四研究室

室長（事務取扱）　鮎澤孝子　　研究員　水野義道

C　本年度の経過

中国語訳のある日本語の小説および日本語訳のある中国語の小説から日中両語の用例を採集し，それに基づいて考察した。とりまとめを行う予定であったが，具体的な形としてまとめるまでには至らなかった。

日本語教育研修の内容と方法についての調査研究

A 目　　的

外国人に対する日本語教育に関して，教員の資質能力の向上を図ること，また，教育の効率化を目指すことは，現在大きな社会的要請となっている。本研究は，教員研修一般についてそのあり方を検討するとともに，国立国語研究所で実施している研修に対して適切な指針を樹立するため，具体的な研究及びその方法の開発を行うことを目的とする。

B 担 当 者

日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育研修室

室長　田中　望（2.12.31まで）　　研究員　古川ちかし（2.7.1から主任研究官）　石井恵理子　　研究補助員　早田美智子　　研究補佐員　川畑美樹（2.12.1から）　　事務補佐員　笠井久美子（2.9.30まで）

C 本年度の経過

本研究は内容を二分し，

1．日本語教育研修の評価に関する研究

2．研修効率向上を資するための調査研究

とする。

1．日本語教育研修の評価に関する研究

日本語教員の教授能力の評価を目指して，その指標の検討や評価観点の洗いだしを進めたが，教員にとって「外的な」指標や評価観点を提出することは，目的の限定，領域の限定が不可欠であることが認識され，一旦振り出しに戻った。教授能力の枠組みをどうとらえるか模索し，教員自身や学習者による各現場での能力定義を追求することが現実的との見解を得た。

2．研修効率向上に質するための調査・研究

1）既存の教員研修用の各種教材の収集・分析，2）多様化した教員研修プログラムについての情報収集と分析，3）各種研修担当者からの直接の情報収集を行った。

言語教育における能力の評価・測定に関する基礎的研究

－日本語教育プログラムの評価とその教育効果の測定を通してみた外国人学習者の日本語能力評価－

A　目　　的

特定の教育法の中での学習力を測る試験は現在も多数存在するが，総合的な観点からの言語運用力を測る試験の開発は遅れており，現在これに当たる試験の数は世界的にみても多いとは言いがたい。こうした試験の開発には，言語能力評価の理論的枠組みの構築と，実証的なデータの蓄積が必要であり，本研究は，ある特定の観点からの試験を開発することそれ自体よりも，そうした試験を今後多方面で開発してゆく際に必要な基礎的部分を供給することを目的とする。

本年度は，技能別試行試験の作成と試行を行う。(a)試作する技能別試験を試行し，内容的な妥当性について主に分析する。(b)試験の理論的妥当性の枠組みを検討する。(c)教育法や学習法の分析を通した言語運用データの解釈を行う。

B　担　当　者

日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育研修室

室長　田中　望（2.12.31まで）　研究員　古川ちかし（2.7.1から主任研究官）　石井恵理子　研究補助員　早田美智子　研究補佐員　川畑美樹（2.12.1から）　事務補佐員　笠井久美子（2.9.30まで）

C　本年度の経過

先行の言語能力測定法についての調査・分析を前年度に引き続いて行うとともに，教授法や学習法と言語能力との相関関係を前々年度のデータに基づ

いて検討した。

日本語教育研修の実施

A　目　　的

① 日本語教育長期専門研修（定員30人）

日本語教育の中心となる人材を養成するために，日本語教育の研究・実務についての専門的研修を研究所において１年課程として行う。

本年度は，次のことを行う。

研修Ａ　所定の講義・演習に基づいて教育実習を行い，教育実習に基づく研究レポートを作成する。

研修Ｂ　日本語教育のための教授法・シラバス・教材というテーマのもとに各自研究課題を設定し，所定の講義・演習等に基づいて研究計画をたて，研究論文を作成する。

② 日本語教育現職者特別専門研修（定員15人）

日本語教育機関の中核的教員の質的向上を図って，教材作成，教授法開発等の実務能力を養成するための研修を行う。

本年度は，(a) 3機関の教員それぞれ５人を対象とし，10か月にわたって月１回以上研究所に来所し，講義・講習に参加する。(b)研修に参加できない遠隔地の教員に対し，学習用ビデオを作成する。

③ 日本語教育夏季研修（東京・大阪各定員120人）

現職日本語教員に対し，日本語及びその教育についての専門的知識の充実を図る。

本年度は，東京会場（研究所・７月30日～８月３日）と，大阪会場（大阪国際交流センター・８月６日～８月10日）の２会場においてそれぞれ実施する。本年度のテーマを「学習者重視の教育」とし，講義形式とワークショップ形式を合わせた形で研修を行う。講義では，年度主題にかかわる諸問題を講述し，検討する。また，ワークショップでは，５クラス

にわかれ，参加者が中心になり，実際に各人があるコースのカリキュラムや授業計画をたてる，あるいは教材を作成する過程を通して，積極的に参加し研修の充実を図る。

④　日本語教育特別集中研修

緊急に日本語教育の実務に従事しなければならなくなった者に対し，必要最小限の教授能力を授ける。

本年度は，文部省学術国際局の依頼により，同局の指定する研修生に対し，上記目的に沿った研修内容・計画を立案し，短期間実施する。

B　担　当　者

日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育研修室

センター長（事務取扱）　水谷　修（2.9.30まで）　宮島達夫（2.10.1から）　部長　西原鈴子　室長　田中　望（2.12.31まで）　研究員　古川ちかし（2.7.1から主任研究官）　石井恵理子　研究補助員　早田美智子（2.12.31まで）　研究補佐員　川畑美樹（2.12.1から）　事務補佐員　笠井久美子（2.9.30まで）

C　本年度の経過

1．日本語教育長期専門研修

1990年度は，受講者28名（研修Ａ21名，研修Ｂ７名）。研修の詳細は同年の実施要領によるので参照されたい。

2．日本語教育夏季研修

受講者は東京・大阪あわせて240名弱。テーマは「学習者重視の教育」。研修の詳細は同年の実施要領によるので参照されたい。

3．日本語教育特別集中研修

文部省側の都合により，現在まではまだ実施されていない。本年度は実施されない可能性が高い。

4．日本語教育現職者特別専門研修

言語文化研究所附属日本語学校，中国帰国孤児定着促進センター，文化外語専門学校の三機関それぞれ5名の教員に対してプロジェクトの援助を行った。本年度は開始が10月であったので，来年度に継続するプロジェクトがあることが予想される。また，教員の自己研修用のビデオ教材の開発を目指して作成企画委員会を発足させ，会合をもったが試作には至らなかった。

日本語教育教材開発のための調査研究

A　目　　的

日本語教育教材開発室において行う教材等開発事業に並行して，その理論的基盤を整備するための基礎的研究を行う。本年度の課題は，事業「日本語学習辞典の作成」に対する基礎研究としての「語の用法の分類基準に関する実用的研究」と，事業「日本語教育モデル教材の作成」における「日本語教育映像教材中級編」関連教材作成に対応する「談話の構造パターンに関する教材開発のための基礎的研究」ならびに「映像教材の利用と補助教材開発に関する研究」の3点である。

B　担　当　者

日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室

センター長（事務取扱）　水谷　修（2.10.1まで）　　センター長　宮島達夫（2.10.1から）　　部長　西原鈴子　　室長　中道真木男　　研究員　中田智子

C　本年度の作業

1．語の用法の分類基準に関する実用的研究

事業「基本語用例データベースの作成」における第2次資料作成に並行して，用法分類基準例を収集し，日本語学習者にとって理解が容易な語の用法分類基準を求めて，その知見を第2次資料作成に還元利用するとともに，将来教授現場における教授内容決定の指針として提供することを目的とする。本年度は，その前段階として，計算機データベース化を意識した用法区分のラベリング案を作成した。

2．視聴覚教材開発のための基礎的研究：次の2点について研究を行った。

①談話の構造パターンに関する教材開発のための基礎的研究

日本語における談話の進め方の諸類型についての知見を得て，伝達能力指導のためのカリキュラム構成の理論的基礎とすることを目的とする。本年度は，関連文献の調査を行い，言語資料を分析して，説得・交渉など，明確な目的を持った談話について，進め方のパターンを抽出し，バリエーションを収集した。その結果の一部として，「研究報告集」に論文を執筆した。また「日本語教育指導参考書19　副詞の意味と用法」のうち，副詞の談話中における機能に関する部分を執筆した。

②映像教材の利用と補助教材開発に関する研究

事業「日本語教育モデル教材の作成」に並行して，その理論的基盤を整備するため，既作成の映像素材の内容を分析し，補助教材作成に利用するとともに，映像素材を効果的に利用するためのハード面の開発を行うことを目的とする。本年度は，「中級編」のレーザーディスク版を作成し，利用実験に着手した。

D今後の予定

用法分類の基準収集は，事業に並行して続行し，ある程度の進展が見られた時点で，報告として公表する。

談話構造パターンの収集は，バリエーションの種類を蓄積する方向で継続し，当面「中級編」関連教材の作成に利用する。

レーザーディスクを中核とする映像教材体系を開発し，試作品を教育現場の利用に供することによって，視聴覚教材利用方法の発展・普及を図る。

日本語教育モデル教材の作成

A　目　　的

日本語教育における有効適切な教材の開発を目ざして，モデル教材を作成する。本年度の課題は，映像素材を日本語教育に利用する方法を改善することを目的とし，内容・掲示方法の両面について研究するためのビデオテープ素材を作成する「日本語教育映像教材　中級編の作成」である。

B　担　当　者

日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室

センター長（事務取扱）　水谷　修（2.10.1まで）　　センター長　宮島達夫（2.10.1から）　　部長　西原鈴子　　室長　中道真木男　　研究員　中田智子

C　本年度の作業

1．「日本語教育映画等企画協議会」の設置

本事業の全般について助言を得るため，標記委員会を設け，会議を3回開催した。委嘱した委員は次の通りである。

（所外委員）

加藤　清方（電気通信大学助教授）

佐久間まゆみ（日本女子大学助教授）

深田　淳（名古屋大学助教授）

南　不二男（文教大学教授）

（所内委員）

水谷　修（日本語教育センター長）

西原　鈴子（日本語教育指導普及部長）

中道真木男（日本語教育教材開発室長）

中田　智子（日本語教育教材開発室研究員）

相沢　正夫（日本語教育センター第一研究室主任研究官）

杉戸　清樹（言語行動研究部第一研究室長）

熊谷　康雄（情報資料研究部第二研究室研究員）

2．『日本語教育映像教材　中級編』関連教材「伝えあうことば」の作成

前年度までに作成したビデオ教材『日本語教育映像教材　中級編』を効果的に利用するため，関連教材シリーズ「伝えあうことば」を作成することとし，今年度は，そのうち2点を作成刊行した。いずれも全国の教育機関・大学・関係個人等に配布するとともに，大蔵省印刷局から市販された。題名及び規格等は，次の通りである。

イ．日本語教育映像教材中級編関連教材「伝えあうことば」1．シナリオ集

「中級編」全4ユニット（24セグメント）の概要，人物設定，場面設定等とせりふ・ト書きを内容とする。

規格　B5版　102ページ　定価1,000円（税込み）

ロ．日本語教育映像教材中級編関連教材「伝えあうことば」2．語彙表

「中級編」全体のせりふに用いられた語を，その使用文脈とともに示した文脈付き語彙表である。使用度数の高い語については，用法分類をほどこしてある。

規格　B5版　246ページ　定価1,500円（税込み）

3．「視聴覚教材の利用に関するアンケート」の実施

国内の日本語教育機関における視聴覚機器・教材の利用状況を知るため，郵送によるアンケートを実施し，その結果を内部資料としてとりまとめた。また，結果の一部を下記「映像教材フォーラム」において報告した。概要は以下の通りである。

題目　「視聴覚教材の利用に関するアンケート」

実施　平成2年6月　調査票郵送

平成2年7月末日　回答返送締切

対象　国内日本語教育機関

大学176校　高等専門学校28校　日本語学校等92校

計296機関

回答　大学100校　高等専門学校25校　日本語学校等54校

計179機関（回答率60.5%）

調査項目　学習者の背景・学習目的，教員数，保有機器，使用教材，映像教材の利用状況，映像教材に対する評価・要望，その他

報告書　A4版　91ページ（その他に調査票見本を含む）　非売品

4．「映像教材フォーラム」の開催

「中級編」の内容，制作意図等を紹介し，視聴覚教材一般の利用方法を話し合う場として，公開の研究会を開催した。会議録の冊子を内部資料として作成した。内容等は以下の通りである。

期日　平成2年8月31日（金）午前10時～午後5時

場所　国立国語研究所講堂

内容　［午前の部］司会：西原鈴子（日本語教育指導普及部長）

あいさつ　水谷修（国立国語研究所長）

「視聴覚教材の利用に関するアンケート」集計結果報告

中田智子（日本語教育教材開発室研究員）

日本語教育における視聴覚教育の現状

加藤俊一（南山大学留学生別科長）

［午後の部］司会：中道真木男（日本語教育教材開発室長）

国立国語研究所作成「日本語教育映像教材　中級編」紹介

中道真木男

マルチメディアによる「中級編」の利用

加藤清方（電気通信大学電気通信学部助教授）

「中級編」の利用法に関する提案

佐久間まゆみ（日本女子大学文学部助教授）

シンポジウム　中級における視聴覚教材の利用をめぐって

加藤俊一・加藤清方・佐久間まゆみ・中道真木男（司会）

一般参加者　約110名

5．『日本語教育映像教材　中級編』レーザーディスクの試作

レーザーディスクによる映像教材の利用方法を開発するため,「中級編」をレーザーディスク化し，コンピュータによって必要箇所を検索することによって，教室での映像提示をより効果的に行う方法の開発に着手した。このため，試作レーザーディスク4枚を作成した。

D　今後の予定

『日本語教育映像教材　中級編』関連教材「伝えあうことば」は，引き続き，「機能分類表」「教師用マニュアル」「教案例集」等を作成する。レーザーディスクの利用方法開発を中心として，映像教材の利用法改善の実験を継続する。

言語伝達行動に関する対照言語学的研究

A　目　　的

日本語による伝達において使用される言語的・非言語的伝達手段の種類と機能を明らかにし，それらを外国語におけるものと比較することによって，日本語学習者の総合的な伝達能力の開発を目指す教育の基礎を築く。

B　担　当　者

日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室

センター長（事務取扱）　水谷　修（2.10.1まで）　　センター長　宮島達夫（2.10.1から）　　部長　西原鈴子　　室長　中道真木男　　研究員　中田智子

C　本年度の経過

日本語による伝達行動の例を収集するため，劇映画の対話場面について，せりふの文字化，イントネーションの記述，随伴行動の記述等を行った。研究分野を概観し，関連領域の研究状況を把握するため，研究会を3回開催した。

D　今後の予定

言語行動記述の方式を検討し，より多くの場面について記述を行うとともに，外国語における伝達手段に関する研究状況を調査する。

日本語学習辞典の編集

基本語用例データベースの作成

A　目　　的

外国人のための日本語学習辞典を作成するための基礎として，個々の語の現実の使用例の収集に基づく用例資料を蓄積し，日本語教育の観点から用法分類を施して，辞書の原形となる用例集を作成するとともに，教授者用資料として提供する。

B　担　当　者

日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室

センター長（事務取扱）　水谷　修（2.10.1まで）　　センター長　宮島達夫（2.10.1から）　　部長　西原鈴子　　室長　中道真木男　　研究員　中田智子

C　本年度の作業

1．「基本語用例データベース作成作業委員会」の開催

データベース作成の方針および具体的作業計画等の検討のため，委員会を設置し，会議を3回開催した。この委員会には，所外委員4名，所内委員5名を委嘱した。

（所外委員）

齊木ゆかり　（東海大学講師）

桜木　紀子　（前クロスカルチャー事業団講師）

畠　　郁　（聖ヨセフ修道院日本語学校非常勤講師）

沼田　善子　（同志社女子大学講師）

（所内委員）

中道真木男　（日本語教育教材開発室長）

中田　智子　（日本語教育教材開発室研究員）

水野　義道　（日本語教育センター第４研究室研究員）

石井恵理子　（日本語教育研修室研究員）

山崎　　誠　（言語体系研究部第１研究室研究員）

2．執筆者会議（ワークショップ）の開催

執筆者間の執筆方針の統一と，執筆内容の質的向上を図るため，前年度に引き続き，執筆者会議を２回開催した。この会議はワークショップ形式をとり，それぞれ前半に用法分析・記述・データ利用等に関する研究発表，後半にグループ形式での共同執筆作業のセッションを設けて，執筆者間の意見交換，質疑応答等の機会とした。

3．客員研究員の採用

この事業の全般に関する立案，特に，執筆方針の検討と執筆要領の作成，および，執筆された原稿の内容点検と執筆者に対する助言などを行うため，引き続き客員研究員を採用した。

浅野百合子　（前国際交流基金海外派遣日本語教師実習講座講師）

金田一京子　（国際基督教大学非常勤講師）

桜木　紀子　（前クロスカルチャー事業団専任講師）

森泉　朋子　（拓殖大学非常勤講師）

4．第１次資料の蓄積

語の実際の用例を収集するため，下表の各テクストに単位分割を施し，文脈付き語彙表を作成した。対象テクストとして，従来語彙調査等が十分に行われていないと考えられる話しことばを重点的に取り上げることとし，ラジオ放送文字化資料を最も主な収集対象とした，また，現実の言語使用と日本語教育教材との格差を明らかにし，また，日本語教材の中で使用されている語彙の実態を知るために，日本語教科書，日本語教育映画等を加えた。これらについては，出現語のすべてを資料化する「全数調査」を行った。また，資料の性質による出現用法のかたよりを補うため，主に一般教養書を対象として「ピックアップ調査」を行った。これは，上記委員会委

員等に依頼して，対象テクストから必要と思われる用法のみを採集するものである。

現在までに収集された用例数は，異なり数約１万語の見出し語について，延べ約21万用例である。

[採録対象資料]

(全数調査)

ＮＨＫラジオ東京第一放送

1976年12月27日　「ニュース」「早起き鳥」「趣味の手帳」
「日本列島北南」「動植物歳時記」「時の話題」
「年末回顧」「文化講演会」

1980年７月16日　「ニュース」「日本列島北南」「おはようジョッキー」
「時の話題」「昼の散歩道」「午後のロータリー」
「ディスク・トゥディ」「トラベルジョッキー」

1984年11月18日　「ニュース」「政治座談会」「シルバー電話相談」

日本語教科書等

海外技術者研修協会「にほんごのきそ」「現代日本事情」

インターカルト日本語学校「日本語中級読解」

水谷信子「総合日本語中級」

東海大学「日本語中級Ｉ」

ランゲージ・サービス
"Intensive Course In Japanese−Intermediate"

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター
"Integrated Spoken Japanese I"

国立国語研究所「日本語教育映画基礎編（全30巻）」「日本語教育映像教材中級編（全４ユニット）」

ＮＨＫ国際放送テキスト「現代日語会話」

一般教養書等

ブルーバックス「空間が人をつくる人が空間をつくる」（部分）

岩波ジュニア新書47「最新科学の常識」（部分）

（ピックアップ調査）

一般教養書等

「昭和恐慌」「ＳＤＩ批判」「大地の微生物世界」「酒と健康」「零の発見」「植物の進化を探る」

5．第２次資料の作成

収集された第１次資料に基づき，各語の用法を網羅し，日本語学習者に提示するために適当な分類を施す作業を継続して行った。本年度は，漢字熟語および副詞の執筆を引き続き行い，さらに形容詞・形容動詞についても執筆を行った。この作業のため，上記委員会の検討を経て，「基本語用例データベース作成作業要領」の補訂を行った。

執筆は下記の所外執筆者に依頼して行った。

浅野百合子，板倉元子，井上紀子，岩崎千圭，金田一京子，久池井紀子，小林ミナ，齊木ゆかり，斎藤里美，桜木和子，桜木紀子，塩入すみ，鈴木百合子，高木洋子，高田恵子，田中久美子，谷口龍子，玉置亜衣子，出口香，土井美鶴，中俣久美子，沼田善子，畠郁，馬場良二，早津恵美子，備前徹，水野千佳子，光信仁美，宮崎妙子，村田淳子，森由紀，森泉朋子，山根智恵，吉川正則，米沢みどり，リード真澄

執筆された原稿について，客員研究員による内部校閲を経た後，外部の校閲者による校閲を行った，この校閲は下記の所外校閲者に依頼した。

水野千佳子，光信仁美，森泉朋子

6．日本語教育指導参考書への利用

副詞項目の第２次資料執筆のために用意された執筆要領と，これに基づいて作成された執筆原稿とを母体とし，その他の研究成果を加えて，「日本語教育指導参考書19　副詞の意味と用法」を作成し，刊行した，内容等については，「日本語教育教材等の作成」の項を参照されたい。

D　今後の予定

本事業は，平成3年までを第Ⅰ期とし，基本語について第2次資料の執筆・校閲を行った後に，さらに第Ⅱ期に移行する予定である。

第1次資料の収集は，この全期間にわたって継続される。

第2次資料の執筆は，続いて「動詞」「和語名詞」を取り上げることが決まっており，こうした語グループごとに執筆要領を作成しながら，継続される。

第Ⅰ期終了後に，それまでに蓄積された第2次資料を公表する形態について検討する予定である。また，それ以前に，第1次資料・第2次資料を各種の研究や「副詞の意味と用法」のような刊行物作成に利用することも検討する。

日本語教育参考資料の作成

A　目　　的

日本語教育に従事する人々の理論面における知識の向上を図るため，種々の分野における参考図書・資料を刊行する。

B　担　当　者

日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室

センター長（事務取扱）　水谷　修（2.10.1まで）　　センター長　宮島達夫（2.10.1から）　　部長　西原鈴子　　室長　中道真木男　　研究員　中田智子

C　本年度の作業

継続して刊行している『日本語教育指導参考書』シリーズの一つとして下記参考書を編集・刊行した。約500部を国内の日本語教育機関等に配布するほか，大蔵省印刷局より市販された。

題名　　『副詞の意味と用法』（日本語教育指導参考書19）

執筆者　畠　　郁（聖ヨセフ修道院日本語学校非常勤講師）

西原　鈴子（日本語教育指導普及部長）

中田　智子（日本語教育教材開発室研究員）

中道真木男（日本語教育教材開発室長）

規格等　Ａ５版　186ページ　定価700円（税込み）

内容　　第一部　副詞論の系譜（畠）

第二部　副詞の意味機能（西原）

第三部　談話中における副詞のはたらき（中田）

第四部　副詞の用法分類－基準と実例－（中道）

D　今後の予定

『日本語教育指導参考書』シリーズの編集・刊行を継続して行う。

図書の収集と整理

前年度に引き続き，研究所の調査研究活動に必要な研究文献及び言語資料を収集，整理し，利用に供した。

また，例年のとおり，各方面から多くの寄贈を受けた。寄贈者各位のご好意に対して感謝する。

平成２年度に受け入れた図書及び逐次刊行物の数並びに蔵書累計は，次のとおりである。

図書

受入　2,207冊

	購入	寄贈	製本雑誌	その他	計
和書	852	556	234	49	1,691
洋書	404	3	109	0	516
計	1,256	559	343	49	2,207

蔵書数　82,752冊（平成３年３月31日現在）

逐次刊行物（学術雑誌，紀要，年報類）

継続受入　857種

	購入	寄贈	計
和	50	721	771
洋	63	23	86
計	113	744	857

庶務報告

Ⅰ　庁舎及び経費

1.　庁舎

所在　東京都北区西が丘3丁目9番14号

敷地		10,030㎡
建物		
第一号館	(延)	5,719㎡
(管理部門・講堂・図書館・日本語教育センター)		
第二号館	(延)	3,015㎡
(研究部門)		
第三号館	(延)	238㎡
(会議室・その他)		
第一資料庫	(延)	213㎡
第二資料庫		106㎡
その他付属建物	(延)	330㎡
計	(延)	9,621㎡

2.　経費

平成2年度予算額

人件費	(478,180,000円)
	465,126,000円
事業費	(237,791,000円)
	243,960,000円
合　計	(715,971,000円)
	709,086,000円

※上段カッコ内は補正後予算額，下段は当初予算額を示す。

Ⅱ　評議員会（平成３年３月31日現在）

会長	有光　次郎	副会長	佐藤喜代治
	碧海　純一		石橋幹一郎
	大岡　　信		岡部　慶三
	加藤　秀俊		倉澤　栄吉
	小山　弘志		坂井　利之
	阪倉　篤義		笹沼　澄子
	鈴木　孝夫		高橋　英夫
	土谷　精作		外山滋比古
	林　　大		肥田野　直
	山田　年栄		頼　　惟勤

Ⅲ　組織と職員

１．定員　70名

２．組織及び職員名（平成３年３月31日現在）

国立国語研究所	所　　長	水谷　　修	2.4.1 日本語教育センター長から昇任
庶務部	部　　長	光岡　康雄	2.5.1 病気休職 3.3.31 定年退職
	〃	森　　孝一	2.5.1 国立西洋美術館庶務課長から昇任
庶務課	課　　長	笹沼　　忠	
	課長補佐	井上　政和	2.4.1 富山工業高等専門学校に出向（庶務課長）
	〃	田島　正幸	2.4.1 国立西洋美術館庶務課庶務係長から昇任
	庶務係長	細田　　信	3.1.1 東京大学海洋研究所に出向（総務課人事掛長）
	〃	藤枝　優一	3.1.1 東京大学附属図書館総務課庶務掛主任から昇任

	文部事務官	荒川佐代子	
	〃	鈴木　修二	
	事務補佐員	河西秀早子	(2.4.1～3.3.30)
	図書主任	大塚　通子	
	文部事務官	網川　博子	
	人事係長(併)	井上　政和	2.4.1 併任解除
	〃	田島　正幸	2.4.1 併任
	文部事務官	横山　哲也	
会計課	課　　長	梅原　啓輔	3.3.31 定年退職
	課長補佐	斎藤　　朗	2.4.1 東京国立博物館に配置換（総務部管理課課長補佐）
	〃	石田　　厚	2.4.1 東京国立博物館総務部会計課用度係長から昇任
	総務係長(併)	斎藤　　朗	2.4.1 併任解除
	〃	石田　　厚	2.4.1 併任
	文部事務官	三浦　　篤	
	経理係長	土佐南洋夫	
	経理主任	岩田　茂男	
	事務補佐員	山田　文子	(2.4.1～3.3.30)
	用度係長	山戸　恵秀	
	専門職員	大内三九次郎	
	文部事務官	太田　修治	2.4.1 文化庁に出向(長官官房総務課)
	文部事務官	佐藤　昭博	2.5.1 国立東京第二病院事務部医事課から転任
言語体系研究部	部　　長	宮島　達夫	2.10.1 日本語教育センター長に配置換
	部 長 (取)	水谷　　修	2.10.1 部長事務取扱
			3.2.16 部長事務取扱免
	〃	中野　　洋	3.2.16 言語体系研究部第二研究室長から昇任

第一研究室	室長(取)	宮島　達夫	2.10.1 室長事務取扱免
	室長(取)	水谷　　修	2.10.1 室長事務取扱
			3.2.16 室長事務取扱免
	〃	中野　　洋	3.2.16 室長事務取扱
	研究員	山崎　　誠	
	〃	鈴木美都代	
第二研究室	室　　長	中野　　洋	2.4.1～3.1.31 外国出張（イギリス，ベルギー，オランダ，デンマーク，スウェーデン，西ドイツ，チェコスロバキア，オーストリア，スイス，イタリア，スペイン，フランス）
	室長(取)	中野　　洋	3.2.16 室長事務取扱
	研究員	石井　正彦	
	研究補助員	小沼　　悦	
第三研究室	室　　長	石井　久雄	
	研究員	高木　　翠	3.3.31 停年退職
言語行動研究部	部　　長	神部　尚武	
第一研究室	室　　長	杉戸　清樹	2.4.19～2.7.18 外国出張（中華人民共和国）
	研究員	尾崎　喜光	
	研究補助員	塚田実知代	
第二研究室	室長(取)	神部　尚武	
	研究員	前川喜久雄	
	研究補助員	早田美智子	
言語変化研究部	部　　長	飛田　良文	
第一研究室	室　　長	澤木　幹栄	2.4.1 信州大学に出向（人文学部助教授）
	室長(取)	飛田　良文	2.4.1 室長事務取扱
	研究員	小林　　隆	

	研 究 員	大西拓一郎	
	〃	白沢　宏枝	
	非常勤研究員	W. A. グローターース	(2. 4. 1～3. 3. 31)
	〃	佐藤　亮一	(　　〃　　)
第二研究室	室　　長	梶原滉太郎	
	研 究 員	田原　圭子	3. 3. 31 停年退職
	研究補助員	中山　典子	
言語教育研究部	部　　長	甲斐　睦朗	2. 4. 1 愛知教育大学教育学部教授から転任
第一研究室	室　　長	嶋村　直己	
	研 究 員	茂呂　雄二	2. 5. 20～2. 5. 29 海外研修（フィンランド，スウェーデン）
	〃	川又瑠璃子	
	研究補助員	小高　京子	
情報資料研究部	部　　長	江川　　清	
第一研究室	室 長 (取)	江川　　清	
	研 究 員	井上　　優	
	〃	中曽根　仁	
	研究補助員	辻野都喜江	
第二研究室	室　　長	米田　正人	
	主任研究官	伊藤　雅光	3. 1. 1 北海道教育大学教育学部助教授釧路分校から転任
	研 究 員	熊谷　康雄	2. 7. 27～2. 8. 13 海外研修（西ドイツ，イギリス）
	〃	伊藤　菊子	
	研究員(併)	田原　圭子	
	研究補助員	磯部よし子	
電子計算機システム開発研究室	室　　長	斎藤　秀紀	病気休職
	室 長 (取)	江川　　清	

	研究補助員	米田　純子	
国語辞典編集室	室　　長	木村　睦子	
	研 究 員	藤原　浩史	
（国語辞典編集調査員）	非常勤研究員	飯島　　満	(2.4.1～3.3.31)
	〃	伊土　耕平	(　〃　)
	〃	貝　美代子	(　〃　)
	〃	菅野　　謙	(　〃　)
	〃	久池井紀子	(　〃　)
	〃	高橋　美佐	(　〃　)
	〃	林　　大	(　〃　)
	〃	樋野　雅彦	(　〃　)
	〃	山田　雅一	(　〃　)
日本語教育センター	センター長㊝	水谷　　修	2.4.1 センター長事務取扱 2.10.1 センター長事務取扱免
	センター長	宮島　達夫	2.10.1 言語体系研究部長から配置換
第一研究室	室　　長	鮎澤　孝子	
	主任研究官	相澤　正夫	2.7.1 研究員から昇任
第二研究室	室 長 ㊝	西原　鈴子	2.4.1 室長事務取扱
	研究員㊞	川又瑠璃子	
	事務補佐員	義本　真帆	(2.4.1～3.3.30)
	非常勤研究員	小出いずみ	(2.4.1～3.3.31)
	〃	青山　文啓	(2.6.1～3.3.31)
	〃	大倉美和子	(　〃　)
	〃	澤木　幹栄	(　〃　)
	〃	高垣　敏博	(　〃　)
	〃	野田　尚史	(　〃　)
	〃	三原　健一	(　〃　)
	〃	メサ・ビルヒニア	(　〃　)

	非常勤研究員	山蔭　昭子	(2.6.18～3.3.31)
(客員研究員)	〃	野元　菊雄	(2.7.1～3.3.31)
第三研究室	室　　長	正保　　勇	2.4.1 東京外国語大学に出向（外国語学部助教授）
	室長(取)	西原　鈴子	2.4.1 室長事務取扱 2.10.1 室長事務取扱免
	〃	宮島　達夫	2.10.1 室長事務取扱
	主任研究官	堀江プリヤー	2.10.1 採用
第四研究室	室長(取)	水谷　　修	2.4.1 室長事務取扱免
	室長(併)	鮎澤　孝子	2.4.1 併任
	研究員	水野　義道	
日本語教育指導普及部	部　　長	西原　鈴子	2.4.1 日本語教育センター第二研究室長から昇任 3.3.12～3.3.19 外国出張（中華人民共和国）
日本語教育研修室	室　　長	田中　　望	2.4.10～2.4.20 海外研修(イギリス) 2.12.31 辞職
	室長(取)	西原　鈴子	3.1.1 室長事務取扱
	主任研究官	古川ちかし	2.7.1 研究員から昇任 2.10.28～2.11.4 海外研修（シンガポール）
	研究員	石井恵理子	
	研究補助員(併)	早田美智子	
	事務補佐員	笠井久美子	(2.4.1～2.9.30)
	研究補佐員	川畑　美樹	(2.12.1～3.3.30)
日本語教育教材開発室	室　　長	中道真木男	
	研究員	中田　智子	
(客員研究員)	非常勤研究員	浅野百合子	(2.4.1～3.3.31)
	〃	金田一京子	(　　〃　　)
	〃	森泉　朋子	(　　〃　　)
	〃	櫻木　紀子	(3.1.16～3.3.31)

3．名誉所員

芦沢　　節　（元言語教育研究部長）

飯豊　毅一　（前言語変化研究部長）

石綿　敏雄　（元言語計量研究部第三研究室長）

上村　幸雄　（元主任研究官）

大石初太郎　（元第一研究部長）

大久保　愛　（前言語教育研究部第一研究室長）

斎賀　秀夫　（元言語計量研究部長）

高田　正治　（元言語行動研究部主任研究官）

高橋　太郎　（元言語体系研究部長）

野元　菊雄　（四代所長）

林　　大　（三代所長）

林　　四郎　（元第四研究部長）

南　不二男　（元日本語教育センター長）

村石　昭三　（元言語教育研究部長）

渡辺　友左　（前言語行動研究部長）

Ⅳ　平成２年度事業

1．刊行書

国語年鑑（1990年版）　〈秀英出版刊〉

国立国語研究所年報－41－（平成元年度）　〈秀英出版刊〉

方言文法全国地図（報告97－２）　〈大蔵省印刷局刊〉

研究報告集－12－（報告103）　〈秀英出版刊〉

国定読本用語総覧５　第３期〔と～ん〕

（国語辞典編集資料５）〈三省堂刊〉

2．日本語教育関連教材

日本語教育指導参考書 19．副詞の意味と用法　〈大蔵省印刷局刊〉

3．日本語教育映像教材中級編「伝えあうことば」

1．シナリオ集

2．語彙集

4．国立国語研究所研究発表会

平成2年3月27日（水）午後2時～4時半

テーマ『北海道における共通語化』

1．北海道調査の概要　米田正人（所員）

2．語彙をめぐって　水野義道（所員）

3．発音・アクセントをめぐって　尾崎喜光（所員）

4．若い世代の動向　杉戸清樹（所員）

5．日本語教育研修（70ページ参照）

日本語教育長期専門研修（平成2年4月2日～平成3年2月22日）

日本語教育夏季研修

東京会場　平成2年7月30日～8月3日

大阪会場　平成2年8月6日～8月10日

特別集中研修（平成3年3月18日～平成3年3月22日）

日本語教育現職者特別研修（平成2年4月2日～平成3年3月22日）

V　外国人研究員及び内地留学生の受け入れ

1．外国人研究員

氏名・国籍・職名	研究題目	研究期間
呂　玉新 （中華人民共和国） 中国上海衛生職工学院 外国語学部教師	中日言語の比較	61. 1. 6から 2. 4.30まで
李　大清 （中華人民共和国） 北京航空天大学外国語 学部研究室主任	和製漢語の研究	2. 2. 1から 3.12.31まで

エツコ・オバタ・ライマン（日本） アリゾナ州立大学準教授	国字の諸問題	2．5.15から 2．8. 8まで
孫　満　緒 （中華人民共和国） 河南省鄭州工学院副教授	日本語の動詞と形容詞について	2．5.24から 3．5.23まで
ヘレン・マリオット （オーストラリア） モナシュ大学助教授	異文化間のビジネス交渉	2．9. 3から 3．2. 1まで
プレム・モトワニ （インド） ネール大学助教授	日本語略語辞典の編集	2．9. 3から 3．2. 1まで
陶　振　孝 （中華人民共和国） 北京外国語学院日本語学部講師	日本語の造語法について	2．9.18から 3．9.17まで
ナネット・タワイン （オーストラリア） クイーンズランド大学教授	日本の国語政策	3．1. 7から 3．1.23まで
ヴィーノルト・ゲッツ （ドイツ） コンスタンツ大学教授	ドイツ人のための日本語	3．1. 8から 3．3.31まで
李　漢　燮 （韓国） 高麗大学（日語日文学科）助教授	日本における日本語の研究文献調査	3．1.12から 3．9.17まで
張　興　権 （中華人民共和国） 中国中央民俗学院副教授	現代日本語語彙とその使用状況	3．2. 5から 3．9.25まで
フレレスビー・ビャーケ （デンマーク） コペンハーゲン大学東アジア研究所研究員	京都のアクセント	3．3.10から 4．4.10まで

2．外国人来訪者・見学者等

2．6．6　国際交流基金文化人短期招聘者　スリランカ　ケニヤ大学人文学部外国語学科長ダサナヤケ氏

2．6.14　オーストラリア　ウォロンゴン大学言語学部教授モロニー氏

2．7.13　東洋アカデミー日本語学院名誉顧問　汪　大捷氏

2．9.18　上海外国語学院教授　王　宏氏

2．9.28　国際交流基金文化人短期招聘者　イラン　テヘラン大学外国語学部長　アフカメーアガダ、アリ氏

2.10．9　平成2年度海外日本語教師短期研修生　39名

2.10.16　中国日本語教師訪日団（10名）

3．1.14　文化庁長官　川村恒明氏

3．2.19　オーストラリア連邦雇用教育訓練省国際局長　ジョン・ミューア氏

Ⅵ　日　記　抄

2．4．2　日本語教育長期専門研修開講式

4.10　第2期第1回移転問題検討委員会開催

4.24　第2期第2回移転問題検討委員会開催

4.25　第10回研究計画会議開催

5.15　第2期第3回移転問題検討委員会開催

〃　日本語教育現職者特別専門研修開講式

5.16　第11回研究計画会議開催

〃　第1回国立国語研究所移転候補地「立川基地跡地」視察会実施（参加24名）

5.22　第2回国立国語研究所移転候補地「立川基地跡地」視察会実施（参加15名）

2．5.23　第49回文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議総会

（学士会館本館）（5.23～5.24）

5.24　平成2年度国立学校等経理部課長会議（東京医科歯科大学）(5.24～5.25)

5.25　第41回文部省所管研究所事務（部）長会議総会（学士会館本館）

5.29　第12回研究計画会議開催

6.13　第13回研究計画会議開催

6.26　第2期第4回移転問題検討委員会開催

6.27　定期健康診断

7. 3　第1回移転問題全体会開催

7. 4　文化庁施設等機関庶務会計部課長会議（麻布グリーン会館）

7.10　平成2年度第1回日本語教育映画等企画協議会

7.11　平成2年度第1回日本語教育センター運営委員会

7.18　第118回国立国語研究所評議員会

7.20　平成2年度第1回基本語用例データベース作成作業委員会

7.26　平成2年度第1回日本語教育夏季研修運営委員会

7.27　平成2年度文部省所轄並びに国立大学附置研究所長会議第3分科会（第1回）

7.30　平成2年度日本語教育夏季研修（東京会場）（7.30～8. 3）

8. 5　平成2年度日本語教育夏季研修運営委員会（第1回）（大阪国際交流センター）

8. 6　平成2年度日本語教育夏季研修（大阪会場）（8. 6～8.10）（大阪国際交流センター）

8.22　中国帰国者に対する日本語指導者研修会（東日本地区）（文化庁主催）（8.22～8.23）

8.23　中国帰国者に対する日本語指導研究協議会（東日本地区）（文化庁主催）

8.24　日本語教育研究協議会（東日本地区）（文化庁主催）

8.29　平成2年度文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議第1分科会（第1回）（東工大　長津田キャンパス）

8.31　視聴覚教材フォーラム

9.28　日本語教育現職者特別研修開講式

10. 4　重点領域「日本語音声」平成2年度中間発表会（10. 4～10. 6）

10.19　平成2年度文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議（第3部会）（神戸市相楽園会館）（10.19～10.20）

10.23　平成２年度第２回日本語教育映画等企画協議会

10.26　平成２年度第２回基本語用例データベース作成作業委員会

10.29　平成２年度文部省所轄研究所長会議（国立天文台）

10.31　第14回研究計画会議

11.　3　平成２年度レクリェーション（御岳山ハイキング）

11.　5　平成２年度日本語教育夏季研修運営委員会（第２回）

11.　7　第15回研究計画会議開催

11.15　平成２年度（第41回）文部省所管研究所第三部会事務（部）長会（如水会館）（11.15～11.16）

11.16　平成２年度文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議第三分科会（第２回）（大阪大学　蛋白質研究所）

11.17　平成２年度日本語教育研究連絡協議会

11.29　文化庁会計課部内監査

11.30　平成２年度日本語教育夏季研修運営委員会（第３回）

12.　1　平成２年度第１回基本語用例データベース執筆者会議

12.　3　平成２年度文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議第一分科会（第２回）（東工大　長津田キャンパス）

12.　6　平成２年度全国研究機関交流推進会（科学技術庁　研究交流センター）

12.　7　平成２年度各省直轄研究所長連絡協議会共通問題研究会（科学技術庁研究交流センター）

12.12　専門用語シンポジウム

12.20　創立記念日　記念講演「漢字の和訓と仮借」　佐藤喜代治

12.22　平成２年度日本語教育現職者特別専門研修教材作成企画委員会

12.26　スカウト式用例採集に関する検討会

３．1.　9　「基本語用例データベース」の作成に関する打ち合わせ

1.19　平成２年度第３回日本語教育映画等企画協議会

1.22　平成２年度各省直轄研究所長連絡協議会第５回幹事会（法曹会館）

2.　8　文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議第１分科会（第３回）

（東工大　大岡山キャンパス）

2. 13　第16回研究計画会議開催

2. 20　第17回研究計画会議開催

〃　日本語教育に関する情報資料の収集のための研究会

2. 22　日本語教育長期専門研修閉講式

〃　日本語教育現職者特別研修閉講式

2. 26　平成２年度文化庁施設等機関次長等幹部会議（東條会館）

3.　5　文化庁施設等機関長会議（文化庁）

〃　文化庁研究職員格付審査会（文化庁）

〃　第２回基本語用例データベース執筆者会議

3.　6　平成２年度文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議第三分科会（第３回）（大阪大学　蛋白質研究所）

3.　8　平成２年度第２回日本語教育センター運営委員会

3. 12　平成２年度各省直轄研究所長連絡協議会定例総会（ＫＫＲ竹橋会館）

3. 15　林崎　裕氏より水彩画掛図原画13点寄贈受入

3. 20　第119回国立国語研究所評議員会

3. 22　国語辞典編集調査会

基本語用例データベース作成作業委員会

3. 27　国立国語研究所研究発表会

3. 29　基本語用例データベース作成の研究打ち合わせ

〃　テレビ放送の国語調査に関する打ち合わせ会

3. 30　平成２年度日本語教育研究連絡協議会

1990 — 1991

ANNUAL REPORT OF THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE

CONTENTS

Foreword
Outline of Research Projects from April 1989 to March 1990
A Syntactic Description of Conversation in Japanese
Studies on the Vocabulary Used in TV Broadcasts
Survey of Researches on Writing Systems
A Study of Written Forms of Native Japanese Words in 90 Magazines
Research on Modern Japanese Honorifics
A Study on the Processes in Reading Japanase Texts
Preparatory Study on the Phonetical Variations in Discourse
A Study for the Production of the "Grammar Atlas of Japan"
Research on the Historical Interpretation of Dialectal Distributions
A Historical Study of Natural Science Terms in Modern Japanese
A Study of the Words Used in the Translations of English–Japanese Dictionaries
A Contrastive Study of the Literary Styles of the Words Used in "Karyū Shunwa"
Research on Children's Kanji Acquisition
Preliminary Study of Children's Vocabulary
Pre–literacy : A Developmental Study of Children's Emergent Reading and Writing
Preparatory Study of Data Orientation
Database of Newspaper Articles on Japanese : Preparatory Study
Compilation of Database for Sociolinguistic Survey —— Research Questionnaires —— : a Preliminary Study
Preparatory Study on the Trends of Japanese Linguistics Studies and Bibliographical Index Making
A Basic Study on the Storage and Retrieval of Large Quantities of

Japanese Linguistic Data
A Contrastive Linguistic Studies of Japanese
A Study of Japanese Sentences Focusing on Their Predicate Structure
A Study of the Current State of Japanese Language Teaching —— Contents and Methodology ——
A Contrastive Study of Japanese and English
Creative of "Simplified Japanese" and Preparation of Its Teaching Materials
Contrastive Studies of Japanese and Indonesian
Contrastive Studies of Japanese and Chinese
A Study of Teacher Training for Teaching Japanese as a Foreign Language —— Contents and Methodology ——
Assessing Competence and Performance in Language Learning : A Basic Study
A Study for the Development of Teaching Materials of Japanese
A Contrastive Study of Discourse Structures in Japanese and Other Languages

Others
General Affairs

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
3 – 9 –14 NISIGAOKA, KITA–KU, TOKYO

平成4年3月

国 立 国 語 研 究 所

〒115　東京都北区西が丘3－9－14
電 話 03(3900)3111(代表)
FAX 03(3906)3530

UDC　058 : 809. 56
UND　　810. 5

国立国語研究所刊行書一覧

国立国語研究所報告

1	八丈島の言語調査	秀英出版刊	品切れ
2	言語生活の実態 — 白河市および付近の農村における —	〃	〃
3	現代語の助詞・助動詞 — 用法と実例 —	〃	3,090 円
4	婦人雑誌の用語 — 現代語の語彙調査 —	〃	品切れ
5	地域社会の言語生活 — 鶴岡における実態調査 —	〃	〃
6	少年と新聞 — 小学生・中学生の新聞への接近と理解 —	〃	〃
7	入門期の言語能力	〃	〃
8	談話語の実態	〃	〃
9	読みの実験的研究 — 音読にあらわれた読みあやまりの分析 —	〃	〃
10	低学年の読み書き能力	〃	〃
11	敬語と敬語意識	〃	〃
12	総合雑誌の用語（前編） — 現代語の語彙調査 —	〃	〃
13	総合雑誌の用語（後編） — 現代語の語彙調査 —	〃	〃
14	中学年の読み書き能力	〃	〃
15	明治初期の新聞の用語	〃	〃
16	日本方言の記述的研究	明治書院刊	〃
17	高学年の読み書き能力	秀英出版刊	〃
18	話しことばの文型 (1) — 対話資料による研究 —	〃	2,060 円
19	総合雑誌の用字	〃	品切れ
20	同音語の研究	〃	〃
21	現代雑誌九十種の用語用字 (1) — 総記および語彙表 —	〃	3,090 円

22	現代雑誌九十種の用語用字(2) —漢字表—	秀英出版刊	3,090 円
23	話しことばの文型(2) — 独語資料による研究 —	〃	品切れ
24	横組みの字形に関する研究	〃	〃
25	現代雑誌九十種の用語用字(3) —分　析—	〃	3,090 円
26	小学生の言語能力の発達	明治図書刊	品切れ
27	共通語化の過程 — 北海道における親子三代のことば —	秀英出版刊	〃
28	類義語の研究	〃	〃
29	戦後の国民各層の文字生活	〃	412 円
30－1	日本言語地図(1)	大蔵省印刷局刊	品切れ
	日本言語地図(1)《縮刷版》	〃	17,510 円
30－2	日本言語地図(2)	〃	品切れ
	日本言語地図(2)《縮刷版》	〃	17,510 円
30－3	日本言語地図(3)	〃	品切れ
	日本言語地図(3)《縮刷版》	〃	17,510 円
30－4	日本言語地図(4)	〃	品切れ
	日本言語地図(4)《縮刷版》	〃	17,510 円
30－5	日本言語地図(5)	〃	品切れ
	日本言語地図(5)《縮刷版》	〃	17,510 円
30－6	日本言語地図(6)	〃	品切れ
	日本言語地図(6)《縮刷版》	〃	17,510 円
31	電子計算機による国語研究	秀英出版刊	品切れ
32	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1) — 親族語彙と社会構造 —	〃	〃
33	家庭における子どものコミュニケーション意識	〃	361 円
34	電子計算機による国語研究（Ⅱ） — 新聞の用語用字調査の処理組織 —	〃	品切れ
35	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2) — マキ・マケと親族呼称 —	〃	〃
36	中学生の漢字習得に関する研究	〃	〃

37	電子計算機による新聞の語彙調査	秀英出版刊	品切れ
38	電子計算機による新聞の語彙調査（Ⅱ）	〃	〃
39	電子計算機による国語研究（Ⅲ）	〃	〃
40	送りがな意識の調査	〃	〃
41	待遇表現の実態 — 松江24時間調査資料から —	〃	〃
42	電子計算機による新聞の語彙調査（Ⅲ）	〃	〃
43	動詞の意味・用法の記述的研究	〃	6,180 円
44	形容詞の意味・用法の記述的研究	〃	4,120 円
45	幼児の読み書き能力	東京書籍刊	4,635 円
46	電子計算機による国語研究（Ⅳ）	秀英出版刊	721 円
47	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(3) — 性向語彙と価値観 —	〃	品切れ
48	電子計算機による新聞の語彙調査（Ⅳ）	〃	〃
49	電子計算機による国語研究（Ⅴ）	〃	〃
50	幼児の文構造の発達 — 3歳～6歳児の場合 —	〃	〃
51	電子計算機による国語研究（Ⅵ）	〃	〃
52	地域社会の言語生活 — 鶴岡における20年前との比較 —	〃	1,854 円
53	言語使用の変遷 (1) — 福島県北部地域の面接調査 —	〃	2,575 円
54	電子計算機による国語研究（Ⅶ）	〃	1,030 円
55	幼児語の形態論的な分析 — 動詞・形容詞・述語名詞 —	〃	品切れ
56	現代新聞の漢字	〃	〃
57	比喩表現の理論と分類	〃	6,180 円
58	幼児の文法能力	東京書籍刊	5,665 円
59	電子計算機による国語研究（Ⅷ）	秀英出版刊	品切れ
60	X線映画資料による母音の発音の研究 — フォネーム研究序説 —	〃	〃
61	電子計算機による国語研究（Ⅸ）	〃	〃
62	研究報告集 (1)	〃	1,751 円

63	児童の表現力と作文	東京書籍刊	6,180 円
64	各地方言親族語彙の言語社会学的研究(1)	秀英出版刊	品切れ
65	研究報告集 (2)	〃	3,090 円
66	幼児の語彙能力	東京書籍刊	8,240 円
67	電子計算機による国語研究 (X)	秀英出版刊	品切れ
68	専門語の諸問題	〃	4,120 円
69	幼児・児童の連想語彙表	東京書籍刊	7,004 円
70－1	大都市の言語生活 —分析編—	三省堂刊	品切れ
70－2	大都市の言語生活 —資料編—	〃	〃
71	研究報告集 (3)	秀英出版刊	4,944 円
72	幼児・児童の概念形成と言語	東京書籍刊	7,004 円
73	企業の中の敬語	三省堂刊	品切れ
74	研究報告集 (4)	秀英出版刊	〃
75	現代表記のゆれ	〃	〃
76	高校教科書の語彙調査	〃	〃
77	敬語と敬語意識 —岡崎における20年前との比較—	三省堂刊	〃
78	日本語教育のための基本語彙調査	秀英出版刊	6,180 円
79	研究報告集 (5)	〃	4,326 円
80	言語行動における日独比較	三省堂刊	品切れ
81	高校教科書の語彙調査 (2)	秀英出版刊	5,150 円
82	現代日本語動詞のアスペクトとテンス	〃	5,150 円
83	研究報告集 (6)	〃	4,326 円
84	方言の諸相 —『日本言語地図』検証調査報告—	三省堂刊	品切れ
85	研究報告集 (7)	秀英出版刊	〃
86	社会変化と敬語行動の標準	〃	9,270 円
87	中学校教科書の語彙調査	秀英出版刊	5,150 円
88	日独仏西基本語彙対照表	〃	8,755 円
89	雑誌用語の変遷	〃	7,210 円
90	研究報告集 (8)	〃	品切れ

91	中学校教科書の語彙調査 II	秀英出版刊	5,150 円
92	談話行動の諸相 —座談資料の分析—	三省堂刊	2,884 円
93	方言研究法の探索	秀英出版刊	7,210 円
94	研究報告集 (9)	〃	品切れ
95	児童・生徒の常用漢字の習得	東京書籍刊	8,034 円
96	研究報告集 (10)	秀英出版刊	5,150 円
97－1	方言文法全国地図	大蔵省印刷局刊	32,000 円
98	児童の作文使用語彙	東京書籍刊	9,800 円
99	高校・中学校教科書の語彙調査 —分析編—	秀英出版刊	5,150 円
100	日本語の母音，子音，音節	〃	9,000 円
101	研究報告集 (11)	〃	5,000 円
102	場面と場面意識	三省堂刊	6,500 円
103	研究報告集 (12)	秀英出版刊	4,500 円

国立国語研究資料集

1	国語関係刊行書目（昭和17～24年）	秀英出版刊	品切れ
2	語彙調査 —現代新聞用語の一例—	〃	〃
3	送り仮名法資料集	〃	〃
4	明治以降国語学関係刊行書目	〃	〃
5	沖縄語辞典	大蔵省印刷局刊	〃
6	分類語彙表	秀英出版刊	1,850 円
7	動詞・形容詞問題語用例集	〃	1,751 円
8	現代新聞の漢字調査（中間報告）	〃	品切れ
9	生店雑談 安愚楽鍋用語索引	〃	1,545 円
10－1	方言談話資料 (1) —山形・群馬・長野—	〃	6,180 円
10－2	方言談話資料 (2) —奈良・高知・長崎—	〃	6,180 円
10－3	方言談話資料 (3) —青森・新潟・愛知—	〃	品切れ
10－4	方言談話資料 (4) —福井・京都・島根—	〃	6,180 円
10－5	方言談話資料 (5) —岩手・宮城・千葉・静岡—	〃	6,180 円

10－6	方言談話資料 (6) ― 鳥取・愛媛・宮崎・沖縄 ―	秀英出版刊	6,180 円
10－7	方言談話資料 (7) ― 老年層と若年層との会話 ―	〃	6,180 円
10－8	方言談話資料 (8) ― 老年層と若年層との会話 ―	〃	6,180 円
10－9	方言談話資料 (9) ― 場面設定の対話 ―	〃	品切れ
10－10	方言談話資料 (10) ― 場面設定の対話　その2 ―	〃	〃
11	日本言語地図語形索引	大蔵省印刷局刊	1,545 円
12	日本方言親族語彙資料集成	秀英出版刊	24,000 円

国語辞典編集資料

1	国定読本用語総覧 1 ― 第1期（あ～ん） ―	三省堂刊	品切れ
2	国定読本用語総覧 2 ― 第2期（あ～て） ―	〃	28,840 円
3	国定読本用語総覧 3 ― 第2期（と～ん） ―	〃	28,840 円
4	国定読本用語総覧 4 ― 第3期（あ～て） ―	〃	29,000 円
5	国定読本用語総覧 5 ― 第3期（と～ん） ―	〃	29,000 円

言語処理データ集

1	高校教科書文脈付き用語索引	日本マイクロ写真	36,050 円
2	話しことば文脈付き用語索引 (1) ― 『言語生活』録音器欄データ ―	〃	51,500 円
3	現代雑誌九十種の用語索引 (1) 五十音順語彙表・採集カード	東京都板橋 福祉工場	231,750 円
4	話しことば文脈付き用語索引 (2)	日本マイクロ写真	

国立国語研究所研究部資料

幼児のことば資料 (1)	秀英出版刊	3,914 円
幼児のことば資料 (2)	〃	3,914 円
幼児のことば資料 (3)	〃	6,180 円
幼児のことば資料 (4)	〃	6,180 円
幼児のことば資料 (5)	〃	6,180 円
幼児のことば資料 (6)	〃	6,180 円

国立国語研究所論集

1	ことばの研究	秀英出版刊	品切れ
2	ことばの研究 第2集	〃	〃
3	ことばの研究 第3集	〃	〃
4	ことばの研究 第4集	〃	〃
5	ことばの研究 第5集	〃	〃

日本語教育教材

日本語と日本語教育 —発音・表現編—	国立国語研究所 文化庁 共編	大蔵省印刷局刊	721 円
日本語と日本語教育 —文字・表現編—		〃	880 円
日本語の文法(上) —日本語教育指導参考書4—		〃	464 円
日本語の文法(下) —日本語教育指導参考書5—		〃	567 円
日本語教育の評価法 —日本語教育指導参考書6—		〃	品切れ
中・上級の教授法 —日本語教育指導参考書7—		〃	515 円
日本語の指示詞 —日本語教育指導参考書8—		〃	515 円
日本語教育基本語彙七種 比較対照表 —日本語教育指導参考書9—		〃	1,030 円
日本語教育文献索引 —日本語教育指導参考書10—		〃	1,442 円
談話の研究と教育 I —日本語教育指導参考書11—		〃	567 円
語彙の研究と教育(上) —日本語教育指導参考書12—		〃	品切れ
語彙と研究と教育(下) —日本語教育指導参考書13—		〃	〃
文字・表記の教育 —日本語教育指導参考書14—		〃	721 円
談話の研究と教育 II —日本語教育指導参考書15—		〃	780 円
外来語の形成とその教育 —日本語教育指導参考書16—		〃	650 円
敬語教育の基本問題(上) —日本語教育指導参考書17—		〃	600 円
副詞の意味と用法 —日本語教育指導参考書19—		〃	700 円

国立国語研究所年報　秀英出版刊

1	昭和24年度	品切れ	2	昭和25年度	品切れ

3	昭和26年度	品切れ	23	昭和46年度	464円
4	昭和27年度	165円	24	昭和47年度	品切れ
5	昭和28年度	品切れ	25	昭和48年度	〃
6	昭和29年度	〃	26	昭和49年度	〃
7	昭和30年度	〃	27	昭和50年度	〃
8	昭和31年度	〃	28	昭和51年度	非売
9	昭和32年度	〃	29	昭和52年度	〃
10	昭和33年度	〃	30	昭和53年度	824円
11	昭和34年度	〃	31	昭和54年度	1,236円
12	昭和35年度	〃	32	昭和55年度	1,339円
13	昭和36年度	〃	33	昭和56年度	1,339円
14	昭和37年度	〃	34	昭和57年度	2,060円
15	昭和38年度	258円	35	昭和58年度	2,226円
16	昭和39年度	品切れ	36	昭和59年度	2,781円
17	昭和40年度	〃	37	昭和60年度	2,781円
18	昭和41年度	309円	38	昭和61年度	2,781円
19	昭和42年度	品切れ	39	昭和62年度	2,884円
20	昭和43年度	〃	40	昭和63年度	2,884円
21	昭和44年度	〃	41	平成元年度	3,000円
22	昭和45年度	〃	42	平成2年度	

国語年鑑　秀英出版刊

昭和29年版	品切れ	昭和37年版	品切れ
昭和30年版	〃	昭和38年版	〃
昭和31年版	〃	昭和39年版	〃
昭和32年版	〃	昭和40年版	〃
昭和33年版	〃	昭和41年版	〃
昭和34年版	〃	昭和42年版	〃
昭和35年版	〃	昭和43年版	〃
昭和36年版	〃	昭和44年版	〃

昭和45年版	品切れ	昭和55年版	品切れ
昭和46年版	2,060円	昭和56年版	〃
昭和47年版	2,266円	昭和57年版	〃
昭和48年版	品切れ	昭和58年版	5,665円
昭和49年版	3,914円	昭和59年版	品切れ
昭和50年版	品切れ	昭和60年版	〃
昭和51年版	4,120円	昭和61年版	8,034円
昭和52年版	品切れ	昭和62年版	8,034円
昭和53年版	〃	昭和63年版	8,034円
昭和54年版	〃	1989年版	8,100円
		1990年版	8,100円

高校生と新聞	国立国語研究所 日本新聞協会	共編	秀英出版刊	品切れ
青年とマス・コミュニケーション	日本新聞協会 国立国語研究所	共著	金沢書店刊	〃
国立国語研究所三十年のあゆみ — 研究業績の紹介 —			秀英出版刊	〃
AN INTRODUCTION TO THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE (1988)				非売品
基礎日本語活用辞典インドネシア語版				〃

日本語教育映画基礎編（全30巻）

（各巻ビデオ及び16ミリカラー，約5分，㈱インターコミュニケーション）

巻	題名	製作年度（昭和）
ユニット 1		
1*	これはかえるです —「こそあど」+「は～です」—	49
2*	さいふは どこに ありますか —「こそあど」+「～がある」—	49
3*	やすくないです たかいです — 形容詞 —	49
4*	きりんは どこにいますか —「いる」「ある」—	51

5 *　なにをしましたか — 動詞 —　50

ユニット　2

6 *　しずかな　こうえんで — 形容動詞 —　50

7 *　さあ，かぞえましょう — 助数詞 —　50

8 *　どちらが　すきですか — 比較・程度の表現 —　52

9 *　かまくらを　あるきます — 移動の表現 —　51

10*　もみじが　とても　きれいでした — です，でした，でしょう —　52

ユニット　3

11*　きょうは　あめが　ふっています — して，している，していた —　53

12*　そうじは　してありますか — してある，しておく，してしまう —　53

13*　おみまいに　いきませんか — 依頼・勧誘の表現 —　53

14*　なみのおとが　きこえてきます — 「いく」「くる」 —　53

15*　うつくしい　さらに　なりました — 「なる」「する」 —　50

ユニット　4

16*　みずうみのえを　かいたことが　ありますか — 経験・予定の表現 —　54

17*　あのいわまで　およげますか — 可能の表現 —　54

18*　よみせを　みに　いきたいです — 意志・希望の表現 —　54

19*　てんきが　いいから　さんぽを　しましょう — 原因・理由の表現 —　55

20*　さくらが　きれいだそうです — 伝聞・様態の表現 —　55

ユニット　5

21*　おけいこを　みに　いっても　いいですか — 許可・禁止の表現 —　56

22*　あそこに　のぼれば　うみがみえます — 条件の表現 1 —　56

23　いえが　たくさんあるのに　とてもしずかです — 条件の表現 2 —　56

24　おかねを　とられました — 受身の表現 1 —　51

25　あめに　ふられて　こまりました — 受身の表現 2 —　55

ユニット　6

26*　このきっぷを　あげます — やり・もらいの表現 1 —　57

27*　にもつを　もって　もらいました — やり・もらいの表現 2 —　57

28	てつだいを　させました ― 使役の表現 ―	57
29*	よく　いらっしゃいました ― 待遇表現 1 ―	58
30*	せんせいを　おたずねします ― 待遇表現 2 ―	58

販 売 価 格

	16m/mカラー	VTRカラー（3/4インチ）	VTRカラー（1/2インチ）
全巻セット	¥741,600	¥551,050	¥444,960
各ユニット	¥115,875	¥ 86,520	¥ 69,525
各　　巻	¥ 30,900	¥ 22,660	¥ 18,540

第 1 巻〜第 3 巻は，文化庁との共同企画

＊については日本語教育映画解説の冊子（非売品）がある。

日本語教育映画　関連教材（日本シネセル社刊）

日本語教育映画　基礎編　教師用マニュアル	（全 6 分冊）	各分冊1,030 円
日本語教育映画　基礎編　練習帳	（全 6 分冊）	〃　515 円
日本語教育映画　基礎編　シナリオ集	（全　1　冊）	1,030 円
日本語教育映画　基礎編　総合語彙表	（全　1　冊）	1,545 円
日本語教育映画　基礎編　総合文型表	（全　1　冊）	1,545 円
映像教材による教育の現状と可能性	（全　1　冊）	2,575 円

日 本 語 教 育 映 像 教 材 中 級 編 一 覧

（各巻ビデオ及び16ミリカラー，約 5 分，㈱インターコミュニケーション）

セグメント	題　　名	製作年度（昭和，平成）
ユニット　1	初めて会う人と　― 紹介・あいさつ ―	
1	自己紹介する ― 会社の歓迎会で ―	61
2	人を紹介する ― 訪問先の応接室で ―	61
3	友人に出会う ― 喫茶店で ―	61
4	面会の約束をする ― 電話で ―	61

5　道をきく ― 交番で ―　61
6　会社を訪問する ― 受付と応接室で ―　61
ユニット　2　人に何かを頼むとき　― 依頼・要求・指示 ―
7　届出をする ― 市役所で ―　62
8　買物をする ― デパートで ―　62
9　打合せをする ― 出版社で ―　62
10　お願いをする ― 大学で ―　62
11　手伝いを頼む ― 家庭で ―　62
12　友達を誘う ― 友達の家で ―　62
ユニット　3　人のことばにこたえて　― 承諾・断りと注目表示 ―
13　お見合いを勧められる　63
14　お見合いをする　63
15　提案をする　63
16　仲人を頼む　63
17　結婚式場を決める　63
18　スピーチを頼む　63
ユニット　4　意見の違う人に　― 問いかえし・反論 ―
19　イベントを提案する　元
20　相談をまとめる　元
21　打ち合わせをする　元
22　交渉をする　元
23　会場の準備をする　元
24　討論をする　元

販　売　価　格

	16m/mカラー	VTRカラー（3/4インチ）	VTRカラー（1/2インチ）
各ユニット	¥162,225	¥97,850	¥76,220
各セグメント	¥ 36,050	¥38,110	¥30,385